
サークルの大学生と

M @ A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サークルの大学生と

【Zコード】

N9787F

【作者名】

M@A

【あらすじ】

サークルで知り合った大学生との話。

俺がまだ、大学生の頃。

ちょうど、

大学生活も中盤を過ぎて後半を迎えた時期だった。

三年からの就職活動で幾つかの内定を得ていた俺は、
ひとまず、卒業後の進路が固まってきたので安堵すると共に、
頭の中にある残りの懸念材料を片付けにかかっていた。

と、言つても卒業する為の単位を取得する事と、

内定を得た中から就職先を決定する事、

くらいなので他の学生達と何も変わらない悩みだった。
この内、就職先については、

第一希望と第二希望から内定を貰つていたので、
そのどちらかになるだろうな、というのをぼんやりと頭に描いていた。

卒業に関しても、

取得しなければいけない単位は無理のある量ではなかつたので、
殆ど悩みなんてない、というのが実情だったかも知れない。
よほどの予測不能な事態が起こらない限り、

自分の前途は洋洋と見えた。

四年の春になると、見通しは更に確かになつてきて、
あとは卒論と単位に集中していればよい、という状態になつた。
その頃になつてくると、

自分の生活に物足りなさを感じてくるようになつてきて、
まるで入りたての一年生のように何か面白い事はないだろうか、

と自分の周りを嗅ぎ回るようになつていた。

構内掲示板や学食で周囲の人間がしている会話の中から興味を惹くような話題がないかと

アンテナを張つていろいろみたいな状態だった。

しかし、俺の希望を満たすようなものは、なかなか見付からない。何か新しい事を始めるにしても一年もしない内に卒業だし、仕事に備えなくてはいけない用事なども発生してくるだろう。新入生ではないのだ。

腰を据えて何かに取り組むような事は出来ないし、

同級生の進路先は様々だから

クラスで何かをするというのも無理があつた。

その時になつて俺は、

思つた以上に自分が不自由な状態であるのを知つた。

しかし、あまり落胆はしていない。

元々、興味のある事を探す、と言つても、

そんなに簡単に見付かる、と期待していた訳ではなかつたものだから、

半ば諦め半分の気持ちで毎日を過ごしていた。

大学に行って、週三回バイトをして……

ところ毎日は退屈ではあつたが平和な日々だつた。

そうして、ちょうど春が終わり、梅雨が来よつか、という頃。興味深い話を聞いた。

俺の所属する学科は文系で、比較的、少人数で構成されているのが、

その内の一人が、あるサークルについての話をしていた。

そのサークルの主な活動は、

俺達の大学と近隣の大学で合同の飲み会を開催している、

といふものらしい。

要するに合コンなのだが、

その言葉から連想させられるものとは雰囲気が全く違い、恋愛色は薄く、酒を飲みながら研究関係の話なんかをするのが主な目的なんだそうだ。

そんな話は初耳だったので、俺は、その話を更に詳しく訊いてみた。すると、その会合は、便宜上「サークル」と呼んでいるが、

会員なんてものはなく、かなり自由な集まりである事がわかつた。そもそもものきつかけは、

俺の大学にいる男と他校にいる女が付き合つていて、彼等が主催者となつて何度か合コンを開催していたが、

次第にカップルが誕生しては抜けて行き、メンバーを入れ替えながら現在は恋愛志向のない者達が残つた集まりだ、という事らしかつた。

これは、面白い、と思つた。

更に詳しく訊いていくと、基本的に参加は自由な事。

ただし、社会人や全く大学に関係のない人はNG。

それから参加費として、

一人分の飲み代程度の会費を徴収される、という事。それ以外に、特別な決まりはない。

会費さえ払えば、途中参加、解散でも構わないらしかつた。

つまり、参加者の会費が当日の飲み代になるみたいだ。

俺は、その話をしてくれた友人に、

次は、いつ飲み会が開催されるのか、という事と自分も参加をしたい、

という話をした。

日程については、はつきりとは決まってないらしい。

「おそらく次の金曜だろう」と友人は言つた。

参加はしたいが、日程がわからないのでは困る。

それに、勝手がわからないのも不便だ、と思つた。

すると、友人は、

「じゃあ、次回は俺も参加するから一緒に行こう」と言つてくれた。

俺は、礼を言って開催日が確定するまで連絡を待つ事にした。

それから、数日後。

友人から連絡が来た。

次回の開催は、やはり一日後の金曜に決まったようだ。

俺は参加の返事と礼を言つて当日の打ち合わせをした。

そして金曜夕方。

講義が終わり、

友人と少し時間を潰してから待ち合わせ場所の駅前へ向かう。
暫く待つていると、予定されていたメンバーが揃つたようなので、
居酒屋みたいな店に移動する。

参加者は俺達を除いて十人ほど。

最初に俺は、簡単に紹介されて名前と学部、学年を言った。

その夜は、とても刺激的な夜だった。

何人かと話をする中、初めて会った人達だったが、
どの人も自分と共通する話題があるのがわかる。

違う大学の人間もいたが、研究内容が似ている人達が多くなった。
後から知つてわかつた事だが、

友人が話した参加条件に俺が聞かされていない事が一つだけあった。
それは、俺の大学からは、どの学部からでも参加出来るが、
他大学からの参加は特定の学部からしか認めていない、という事だ
った。

これは、複数の大学を跨いでの集まりで

参加者同士が馴染み易くする為のある種の方策だったみたいだ。

自分の大学なら多少学部が違つても話が合うだろうが、

他の大学となると、なかなかそうもないかない事が多い。

その為、他校の参加者は、

文系のある方面を専攻している人間だけが参加出来る事になつてい
た。

と、言つても著しく狭い範囲ではないから狭い門でもない。

俺の大学からの参加者に対して門が広いのは、人々、

このサークルを始めた人間と現在の主催者が俺の通う大学だった、
という理由が大きいだろう。

だから、俺と同じ大学ではない人間は、

俺と専攻内容が似ている可能性が高かった。

友人は、俺が、その条件を満たしていく、

尚且つ条件を満たさなくなるような恐れがないので

説明を省いたのだろう、と思われる。

どちらにしても俺が参加するのに不都合はないし、

聞いても聞かなくても困らない条件ではあった。

しかし、その規制の御蔭で、

俺が初対面の人達に苦もなく解け込めたのも事実だった。

結局、その日は、

研究上の議論と卒業後の話などの雑談をして時間が過ぎていった。

帰り道は、上機嫌だつた。

議論がこんなに楽しかったのは、いつ以来だろう？

中学校の時、プロ野球の両リーグベストナインを
友人と決めようとした時以来かもしれない。

そんな懐かしさが湧いてきた。

参加者は、初めて会つた人達だつたが、

皆それぞれ何年か学んできた中で得た持論があるので
自然と話が盛り上がりやすい。

講義で得た知識、自分で学んできた理論などを御互いが戦わせるの
だ。

そう言うと、どこか物騒なイメージがあるが、

誰かが誰かを打ち負かせる為の議論じやないから、

御互いを尊重しつつ進んでいく話し合いが新鮮で気持ち良かつた。

その一日後。

誘ってくれた友人が飲み会の感想を訊いてきたので、

楽しかった事と、また参加したい事を話した。

友人は喜んでくれて、一度参加したなら、

もう一人で行きたい時に行つて構ないと教えてくれた。

俺は、開催日はどうやって知るのかと訊くと、

主催者にアドレスを訊けばいいらしい。

そうすれば、向こうからメールで知らせてくれるようだ。

友人は、最後に、こう言った。

「とりあえず次回の日程が決まつたら俺が教えるから、
そこで参加して、後は自分でアドレスとか訊きなよ」

俺は礼を言つて連絡を待つた。

それから数日後。

友人からメールが届き、

そこには次回のサークルの待ち合わせ時間と場所が書いてあった。
それから今回、自分は参加出来ないが楽しんできてくれ、
という意味の言葉があつた。

時間や場所は前回と同じだつたから迷わないだろう。

曜日は、やはり金曜日だった。

そして当日、駅前。

待ち合わせ場所に着くと、

前回、知り合つた顔を見かけたので、挨拶をしたりした。
全員が揃つたようなので、店に向かう。

今回の参加者は二十人程度。

前に見かけた顔は半分くらいか。

人数が増えている分、賑やかで、同じ店に入ったのだが、
今回は大きなテーブル席に案内された。

乾杯が終わると、雑談から次第に前回のような盛り上がりに。

前回知り合つた人が話を振つてくれたりしたので、

俺も積極的に話し合いに加われた。

この辺の流れは図つたように同じだった。

違いと言えば、微妙に参加者が異なるくらいだ。

その中で一人、気になつた女がいた。

前は友人がいたせいで様子見というか

友人の陰に隠れていたような形だったせいもあるけど、
参加者全員にまで意識がいかなかつた。

今回は一人だつたせいで自然と色んな人に視線がいったので、
前回よりも参加者の顔を知る事が出来た。

飲み会の席なんて決まつてるように見えて、
決まつてないようなものだつたから、

適当に周りの人間が変わつていくけど、

始まつて一時間くらい経つた頃、その子は俺の隣に座つて声をかけ
てきた。

「見ない顔だけど、初めて？」

「はい。前回からです」

俺も、その子に見覚えがなかつた。

おそらく前回は來ていなかつたのだろう。

全体的に目立つ容姿だつた。

髪は緩いウェーブがかかつていて茶色い。

若干、吊目というか猫目で、

頬には張りがあつて健康的な雰囲気がした。

酔つていて血色が良いせいで、そう見えるのかもしれない。
肌が白いから火照つているのが、よくわかつた。

「そう……。誰かの紹介？」

流し目で見られるとゾクリとする妖艶な雰囲気がある。
その瞳のせいだ。

「ええ……」

俺は友人との経緯を簡潔に話した。

すると、彼女は、あの人の友達なのか、という表情をした。

彼女とは、そこから友人に関する話題や御互いの専攻についての話題で盛り上がる。

そんな感じで一回目の飲み会は、一回目よりも楽しく過ごせた。徐々に知り合いが増えしていく手応えもある。

最後の方で主催者にアドレスを訊いた。

主催者は、俺と同じ大学の同じ学年で、違う学部の男だった。これに参加するまでは顔も知らなかつたが、人当たりのいい容貌で物腰も柔らかかった。

俺が次回も来たいと言つと、嬉しそうな表情を見せた。

三回目は、次の土曜に開催された。

もう三度目となると、俺が冷やかしではない、といつ認識をされてきたのか待ち合わせ場所でも歓迎されているような空気を感じた。

今回は十人近く。

また同じ店に入った。

どうやら、ここ以外には行かないみたいだ。

六人掛けくらいのテーブルを二つ繋げた座敷に案内される。掘り炬燵のような場所だから、

靴を脱いでも椅子に座ると変わらないでいられた。各自、適当に席に着く。

もう知った顔ばかりだつたから、ビニに座つても困らない。気を遣う事は少ないし緊張もない。

俺は、主催者から遠い、通路に近い席を選んだ。すると、隣に女が座つた。

見ると、一回目で知り合つた猫目の女だ。

「また来たんだね」

そう言つて笑う。

髪を払つた時に耳元でピアスが光つた。

俺は曖昧に返事をする。

注文を訊かれて飲み物が届くと乾杯になつた。
それから、また熱い話が展開される。

この感じが好きだ。

何とも言えない昂揚感。

俺は、これまでの二回以上に話をした。
研究関係の深い話もしたし、

時折、誰かの意見に反対するような事も言つた。
自分が何を学んできたか、これからどうしていきたいか。

そんな若い衝動をぶつけあつた。

隣が少し気になつたが、彼女は、あまり話さない。

と言うか、話そうとしない。

その癖、席も移らない。

ただ飲んでいる事が多かつた。

何となく不思議な気がした。

会の終盤では、遂に酔い潰れて寝てしまつたみたいだ。
周りも、あまり気にしていない。

時折、大丈夫かと、声を掛けても反応がない。
心配になつたが、

「いつもの事だから」と別の人によわれたので、そつとしておいた。

俺は、今まで二回、飲み会に参加して、
最後までいた事はなかつた。

今日は、明日の予定がないのもあって、
最後まで残つてみようと来た時から決めていた。
馴染みの顔が増えたのも影響している。
それから、飲んだり話したりしながら、
一人、また一人と人数が減つていき、
大体、四時間ほどで御開きになつた。

零時には、まだ一時間以上ある。
充実感と僅かな疲労。

だが、全体的に満たされた思いが支配的だった。

席を立とうとするとき、隣の酔い潰れた女を二、三人で介抱している。

「大丈夫ですか？」

俺は半分義理で声を掛けた。

「うん。多分、平気。最近、多いのよねー、この子」

一人の女が言った。

「そうですか……」

気にはなつたが、人がいるし心配ないだらう。

そう思つて帰ろうとした時、背後から呼び止められた。

「ねえ……俺さんて、家どー?」

そう声を掛けたのは、

さつきから傍にいて背中を擦つたり一番親身になつて介抱していた髪の短い女だつた。

「……………ですけど…………」

何の事かわからなかつたが、俺は家の番地を言つ。

「これから……帰る所だよね?」

「ええ……まあ……」

俺が、そう答えると、

介抱していた女達は一様に安堵したような表情を浮かべて言つた。

「ちょっと悪いんだけどさ…………」

この子を家まで連れて行きたいのよ。手伝ってくれない?」

彼女が言うには、

酔い潰れている子が起きないので家まで連れて行きたい。

しかし、この中に同じ方向の人間はいないし、

女の力では大変だから男手が欲しい。

できれば、俺に手伝つてもらえば、助かる、という話だつた。

「無理矢理、起こせませんかね?」

俺は、声を掛けてきた髪の短い子に訊いた。

「ダメダメ。私達、前もそうなつた時に起こそうとしたんだけど、なかなか起きないのよ」

緩やかな眉根を寄せる。

「でも、放つておく訳にもいかないでしょ？
だから前は三人で協力して背負って家まで送つて行ったんだから」
そう言つと同意を求めるように横の女を見た。
目を向けられた子は小さく何度も頷く。

俺はテープルを見下ろした。

腕を枕にして寝ている彼女は、

聞いたように何をしても起きないような様子ではあった。
少し迷つたが、俺は結論を出す。

「それで……俺は何をすればいいんですか？」

店を出ると、夜風が気持ちいい。

夜、出歩くには向かない季節が、漸く終わりを告げたようだ。
少し寄り道をして散歩でもしたい気分だった。

背中の御荷物さえなれば……。

隣で監督するみたいに並んでいる髪の短い女の指示に従つて、
俺は酔い潰れた女を背負つていた。

太つてはいないが、どう見ても四十キロはあるだろう。
それを背負つて歩くのは、男とは言え、楽ではない。

彼女の指示によると、このまま電車に乗つて行くようだ。

隣の女は、背中の彼女の荷物を持ち、彼女の家まで案内する役目。
俺は、その子を家まで運ぶ役目。

見事な役割分担だ、と髪の短い女は自画自賛していた。

飲み会の店は、駅前にあるので数分で改札が見えてきた。

俺は、それだけで息が上がつてしまつた。

残つていた他の子は駅までついて来ると、

俺達に任せて笑顔で帰つて行く。

そこからは、俺の自宅方向へ向かう電車に乗つた。

背負われた彼女は完全に寝入つてゐるみたいで、

電車に乗つても一向に目覚める様子がない。

「一駅目で降りるから」

と言われたので、その通りにする。

前を行く女に遅れないように、ついて行った。

背中の彼女の家は駅から歩いて五分ほどのアパート。個人向けらしく、あまり広くなさそうな部屋が八部屋あった。二階建ての各階に四部屋。

先に行く女は1階の奥へ進んでいく。

一番奥のドアの前でこちらを振り返った。

俺が辿り着くのを待つてから、「ここ」と田で合図する。

それから彼女が運んできた鞄の中を漁つて部屋の鍵を探し出した。（勝手に開けていいのかな……）

そんな思いが浮かんだが、こうでもしなければ

背中の彼女は帰つて来られなかつたのだから構わないだろう。

黙つて、その様子を見ていると、すぐにドアが開いた。

開けてくれたドアの中に足を踏み入れると、

想像通り1DKくらいの広さ。

玄関を入つて、すぐの場所に、ゆっくりと彼女を下ろした。

座らせるようにしたつもりだったが、

蒟蒻のように寝転がつてしまつた。

「どうしましょう?」

俺は隣の女に訊ねる。

「とりあえず、運んでくれてありがとう」

「いえ……」

「ここで寝かすのも、あれだからベッドまで運ぼうか

「上がつていいんですか?」

「平気よ。風邪引くよりいいでしょ?」

「はあ……」

「じゃあ、そっちがベッドだから運んじゃこましまよ」

俺は再び彼女を抱き上げようとした時、不意に浮かんできた疑問を口にする。

「あの……ベッドに運びますよね」

「うん」

「その後、どうするんですか？」

そのまま俺達が帰つたら鍵も掛けられないですよ

「あつ……そつか……」

「鍵だけ持つて行く訳にはいかないし……」

「そうねー」

「前の時つて、どうしてたんですか？」

「前は、ここまで来るので、もつと時間がかかつたから……ほら、女人の人だけだつたし……」

その時は、家に着く頃には起きてくれたんだよね……」

「そうですか。……で、どうします？」

どちらに主導権があるのか、わからなくなってきた。

「鍵だけ持つて、外に出て、

鍵を掛けた後にポストに入れておくか……でも、それもまずいか……」

……

彼女は、いい方法が思いつかなくて、今後の行動を決めかねていた。ここは、全部屋のポストがアパートの敷地内の、入つてすぐ横にあって、各部屋のドアに直接ついているタイプではなかつた。

だから、今、言つた作戦を採用するなら、

出来れば鍵は、もう少し安全な場所がいいだろ。

それとも、目の前の彼女に鍵を預かつてもらうか……。

しかし、それでは寝ている子が不便だろ。

そんな事を話し合つていたら、寝ていた彼女が急に起き上がつた。

「あれ？」

半分閉じた目で、周囲を見回している。

「ここ……私の……家？」

俺達は顔を見合させて喜んだ。

急いで状況を説明して彼女を起き上がらせる。

それから、

俺達が外に出たら鍵を掛けるように言って、一人で外に出た。
すぐに言われた通り錠がかかる音がした。

これで、とりあえずは大丈夫だろう。

同じ道を通り、二人で駅まで戻った。
もう少しで終電だったのでも危うい所だ、と溜息をつく。
更に一駅乗つて俺の方が先に降り彼女とは別れた。
帰宅すると零時を過ぎていた。

2

これまで飲み会には三度、参加してみたが、
俺としては特に嫌な事もなく楽しさだけが残った、という感想だ。
前回みたいな終わり方は勘弁して欲しいが、
アクシデントだと思えば気にならない。

他に問題と言えば金くらいか。

これから毎週参加し続けるのは厳しいかもしねないが、
貯金も多少あるしバイトもしている。

他に金の使い道もなかつたし、

恋人と食事をしていると思えば痛い出費でもない。

何より、その自由な雰囲気が良かつた。

拘束がない。

責任も規則もない。

妙な、しがらみとか上下関係もなかつた。

皆が対等に話し合えるのもいい。

あれから大学構内で声を掛けられる機会が増えた。
振り返ると、

飲み会に参加していたメンバーで簡単に挨拶を交わしたりした。

髪の短い子と酔い潰れた子は見かけなかつた。

違う学部か、と思っていたが、

これだけ見ないという事は違う大学なのかもしない。

そうしている内に、また案内メールが来た。

四度目だ。

どうやら、この会は、金曜か土曜に開催される事が多いらしい。

当時、俺は、たまに金曜にバイトに入る時があるくらいで、

金曜と土曜は殆ど空いていたから特別な用事がない時は参加出来た。これが日曜だとバイトがあつたから参加出来る機会は少なかつただ

るわ。

このサークルは、

ちょうど、ぽつかり空いた俺の隙間に綺麗に嵌まり込んで、
そして静かに馴染んでいった。

きっと、相性が良かつたのだろう、と思つていて。

最初に誘つてくれた友人に、

「今日は行くのか?」と訊いたら、「行かない」と言われた。

どうやら別方面で気になる女がいるみたいだ。

彼は、暫く付き合えないと思つ、と語つた。

俺は迷つたが、結局、今回も参加する事にした。

いつものように駅前に行くと、髪の短い女を見付けた。

俺は近付いて挨拶をする。

向こうも気付いて返事をした。

俺は改めて自己紹介をする。

彼女も同じように名乗つた。

やはり違う大学で、俺の通う大学からは比較的近い。
歩いていくような距離ではないが、

地理的には『御隣さん』という位置付けになるだろう。
名前はエリ。

今日はジーンズに長袖のシャツという格好だった。

肩から掛けているバッグは女の子っぽいが、服装や髪型はボーライッシュな感じだった。

髪が短いのと顔立ちのせいでの見えるのかもしれない。気さくに話しながら五分ほど、皆が揃うのを待つ。

全員が揃つたらしので店へ移動。

今回は十五人前後の集まりだった。

エリは、自分から話しかけてくる方ではなかつたけど、近くの席だつた事もあり何度も話した。

前回は突然の依頼に戸惑つていたのもあって

冷静に彼女を捉えられなかつたが、

改めて見ると顔立ちは整つているし、

控え目ない子だ、という印象を受けた。

俺の話にも合わせてくれるので、一旦、話し始めるとき話が続く。少し、ぶつきらぼづな物言いが特徴だった。

そうして一時間ほどした頃、店に新しい客が入つてきた。

見ると、前に酔い潰れた女だつた。

その女は、こつちを見てエリを見付けると手を振つて近付いてくる。そうして彼女の隣に勢いよく座る。

店員を呼び止めて、飲み物を注文した後、

二人は爆発したように話出した。

どうやら一人は同じ大学で仲も良いらしい。

そうでなければサークルに来て、

酔い潰れた女を家まで送つていいくような真似はしないだろう。

俺は置いて行かれたように黙つて、その様子を眺めていた。

酔い潰れた方はアヤカという名前らしい。

皆には『アヤちゃん』と呼ばれていた。

エリと比べると外見は女らしい。

髪は長くて、巻いている感じに緩くパーマがかかっている。

まだ、それほど暑くないのに

ノースリーブにミニスカートという露出度の高い服装をしている。しかし、暫く傍で見ていると、中身はアヤカの方が男らしいのがわかつた。

とにかく、よくしゃべるし、よく飲んだ。

そうして、隣で二人の様子を窺つていると、

アヤカが不意に、こっちを向いた。

「君さー、飲んでないんじやない？」

「ええ……まあ」

「もつと飲みなよー」

「そうですね……」

「てゆーか、前も来てたよねー」

どうやら前回、俺が家まで送った事なんて覚えていないらしい。話を聞いていると、

最新の記憶が前々回にあるみたいで、彼女の言つ『前』といつのは、俺が二回目に参加した時の事を指しているらしい。

それを聞いて、隣のエリが彼女の腕を引っ張る。

エリは、

俺に申し訳なさそうな顔を見せて前回の経緯を彼女に説明し始めた。

アヤカは、それを聞いて俺の方を向くと、頭を下げた。

「そりなんだー。なんか御面倒を御掛けして……」

あまり、すまなそうな口調ではないが、何となく憎めない。

執り成すようにエリが口を挟んだ。

「そりやー、大変だつたんだから。ねー」

俺は、とりあえず微笑んだ。

本当は、そんな簡単に、

サラッと流せてしまえるような苦労ではなかつたが、

当人の手前、重かつたとか大変だつた、とは言つづら。

「今日は飲み過ぎちゃダメだよ」

最後にエリは、そう締めくくる。

「はいはい」

アヤカは神妙に頷いてから思い付いたように提案する。

「じゃあ、御詫びに私が一杯奢ろう。

……ところで、君は名前、何ていうの？

俺はエリにしたように自己紹介をした。

「ふーん、じゃあ俺くん、何でも好きなものを頼みたまえ」

何故か上から目線の口調だ。

その様子が、どこか滑稽で、

学芸会で不慣れな女王様役をやらされてしまった

高校生みたいな言い方に思えた。

俺は、遠回しに遠慮したが、しつこく勧められて、ビールを頼んだ。

すると、彼女も同じものを頼む。

そんな風にして、

その日は、殆ど一人を相手に時間が過ぎていったが、
飲み会が終わる頃には、またしてもアヤカは酔い潰れて寝ていた。

その内、起きるだらうと待つても起きない。

結局、前回と同じ流れになり俺が背負つて送つていく事になった。
前に、最後まで残つていて見知った女の子もいたが、
俺がいるのを確認すると、まるで当然送つしていくもの、
という態度で先に帰ってしまった。

再び、俺とエリは、アヤカの家まで向かう。

一度経験しているだけに要領がわかつていたので

前ほどの苦労はなかつた。

無事、送り届けられて安心する。

今日はアヤカの肩を揺すつたら、すぐに起きた。

かなり不機嫌そうな表情だつたが……。

一人で駅へ戻る途中、疑問に思つて俺はエリに訊いてみた。

「彼女、毎回こうなんですか？」

「んー、わりと最近は、こうかな」

「酒飲みなんですね」

「そうじゃないんだけどね……」

やがて駅について電車に乗り、俺達は別れた。
少しだけエリとアヤカの関係が気になつたけど、
家に着く頃には、すっかり忘れてしまつていた。

五回目のメールが来る頃には梅雨も終盤で、
いつ明けて夏が来るのかが待ち遠しく思われた。
天氣予報でも梅雨明けを予想している。

あと一ヶ月もしないで夏休みだったが、
その前にある試験が頭にあつたので

飲み会への参加を悩んだが、行く事にした。
気晴らしを兼ねて、と試験科目が少なかつた、
というのを自分に対しての言い訳にする。

待ち合わせ場所に着いて店に移つても、エリもアヤカの姿も見えなかつた。

少し残念な気がしたが彼女達に会うのだけが楽しみでもない。
近くに座つた人達との会話を楽しんだ。

時期的に、やはり試験や卒論の話が出た。
試験科目とか論文の進行状況とか、

そうした雑多な情報などが耳に入る。

俺は、ここが、ただの飲み会ではなくて、

こういう風に情報交換の場でもあるなら

試験前に参加しているのも無駄にはならないな、と考えていた。
そうしていると、遅れてアヤカがやつてきた。

半袖のTシャツにジーンズという格好。

俺の姿を見つけると、当然のように隣の人間を押し退けて座る。

「俺くん、何、飲んでんの？あー、すいませーん。私も、これ下さーい！」

通りすがりの店員を呼び止めて注文を済ませた。

彼女が来た事で、それまで話していた周りの人とは話せなくなつた。

アヤカは、

殆ど俺に話しかけてくるので自然と相手をしなければいけなくなる。
結果的に一人で話しているのと変わらない風になつた。

話の内容は、他の人と話しているのと、
そんなに変わりがないが、時々エリの話も出た。

その機会に俺は訊いた。

「今日は　さん来ないんですか？」

「エリの事？」

俺は彼女の苗字を言つたので、アヤカは訊き返してきた。

「はい」

「どうだらうねー。何か言つてたつけ？」

思い出すように首を傾げている。
俺は返事を待つたが無駄だつた。

話しながらも彼女の飲むペースは落ちない。
俺は、それとなく止めさせようとした。

「あれ……」

「何？」

「あまり飲み過ぎない方がいいよ」

「何で？」

「いや……体にも良くないし……」

あまり煩く聞こえないように気をつけながら話すが効果がない。

「文句あるの？」

「そうじゃないんだけどさ」

「私が酔つても俺くんに迷惑かける訳じゃないでしょ！」

勢いよくテーブルに置いたジョッキが音を立てた。

(いや……かかるますけど。迷惑)

どうやら既に酔っているみたいだ。

こうなると、どうにもならない。

なるべく注文させないようにしてみたが、結局、飲んでしまう。

俺は、もう気にしない事にした。

同時に、

もし今日酔い潰れても絶対に送つていかないぞ、とも心に誓つた。
しかし、その誓いは虚しく破れた。

会も終わりに近付くと、案の定、彼女は寝てしまつていた。
御開きになると、俺は気付かない振りをして店を出ようとすると、周りの人間が彼女を送つていかないのか、と言うのだ。
すっかり俺が彼女を送つていいくのが当たり前という空気になつてゐる。

放つておく訳にもいかないが、誰も自分が関わらうとしたくないのだろう。

最終的には、その空氣に押されてしまった。
エリもないので、誰も手伝ってくれない。

一人でアヤカを背負つて荷物を持って駅に向かつた。

彼女の家に向かつのも、もう二度目だ。

勝手もわかつてしまふのが悲しい。

何とか家に辿り着くと、一度彼女を玄関前に座らせた。
やはり起きる様子がないので、鞄から鍵を探して取り出す。
それから彼女を部屋に運び込んで玄関先に座らせた。
(さて……どうしよう)

足元で壁にもたれている彼女を見下ろす。

前回みたいに上手く起きてくれるといいが……。

呼びかけてみる。

起きない。

顔を揺すつてみた。

すると、一瞬、目を開ける。

驚きつつ喜んだが、すぐに目を閉じてしまった。

それから靴を脱がせて立たせてみようとした。

靴は問題なく脱げたが、立たせるのは無理だった。

(どうしようか?)

前回、考えた事が、もう一度浮かんだ。

このまま帰ってしまうのは無用心だ。

だからと言つて起きるまで待つているのも終電が近いせいでは出来ない。

彼女はアルファベットのKの字みたいな体勢で横たわっている。仕方ないからポストに鍵を入れて置くのが妥当な案だひつ。

鍵の場所はメモにでも書いて置いておけばわかるはずだ。

ただ、この場所で寝かせていくと風邪を引いてしまうかもしれないし、

前に話したみたいにベッドまでは運んだ方がいいんじゃないだろうか。

部屋は、あまり広くなさそうなので、入ってしまえば勝手はわかるに違いない。

そう結論付けて彼女を起こうとした。

ゆっくり近付いて、上体だけを起こすようにして両手を持った。

そうして、彼女の背中を片手で支えて、空いた手を膝の下に入れようとする。

Tの字のように横向きに相対して、

力を入れて起こそうとした時に、彼女も起きようとしたのだひつ。

俺はしゃがんだ体勢から斜め上に起こされうとして後ろに下がるひつになり、

彼女は身を任せるように前に前傾してきた。

(あつ……)

と思つた時には既に遅く、

さつき彼女が横たわっていた一メートルほど隣で

俺は彼女に押し倒されていた。

すると、彼女はそのまま押し掛かってきて、いきなり唇を合わせてきた。

「……ちよつ……おい……」

開きかけた口に彼女の柔らかい唇が蓋をする。

何か言おうとしたが、

唇を塞がれているから、鼻息とくべもひた声しか出ない。そのまままでいるしかなかった。

黙っていると、

彼女は暫く身を寄せていた後、ゆっくりと唇を離していった。
薄暗い中で彼女を見上げる。

あまりよく見えなかつたが、彼女の口元が緩んでいるのがわかつた。
俺は問い合わせる。

「いつから起きてた？」

「まあまあ、そんな野暮な事は言わないの」

口の端を上げている。

笑っているのだろう。

「野暮とかじやなくてさ、起きてるなら自分で歩いてよ」

「んー、いや起きたのは、わつきだよ」

彼女は言い訳するみたいに言った。

俺が、ここまで一人で運んで来たのを非難めいて言つと、
「だーかーらー。ちゃんと払つたじやん

「何を？」

「運び賃」

「……貰つてないけど」

そう言つと彼女は無言で腕を上げ、

ゆっくりと人差し指で自分の唇を叩いた。

俺は意味がわからず無言で首を傾げる。

彼女は、俺に理解されず不満そうだった。

「だーかーらー。キスよ、キス」

「キスが、何？」

「運び賃には充分でしょ？」

「いや……、俺、そんな事、望んでないけど

「そんな事つて何よ！」

「あー、ごめん、そういう意味じやなくてさ」

「不満なら、もつとしようつか?」

「結構です!」

何が楽しくて、

肉体労働の後に好きでもない女とキスしないといけないんだ。
彼女は体重を掛けて圧し掛かっていたが、
上手く押し返して圧迫から逃れる。

「大丈夫そなんで、帰りますね」

俺は、シャツの裾を直して立ち上がる。

運んできた彼女の鞄を手渡して、背中越しに声を掛けた。

「じゃあ、また」

ノブを掴んで一步、外に出ようとした時だ。

「泊まつてく?」

低く掠れた声が響いた。

その言葉を無視して玄関の外に出る。

どうせ酔っ払いの戯言だ。

俺は、彼女の言葉が聞こえなかつた振りをした。

「じゃあ、おやすみなさい」

振り返つてノブを掴みドアを閉める。

静かに、そして、ゆっくりと俺の視界から彼女が消えていく。
俺が完全にドアを閉めるまで、

彼女は何を言わず、じっと玄関に座つて俺を見上げていた。

アヤカとのキスがあつてから、暫く俺は飲み会に参加しなかった。

『暫く』と言つても、

ほんの一、二週間程度の事であつて、

何か特別な理由があつた訳ではなく、

単にテスト期間中だつた、というだけだ。

俺は、バイトも休んでテストに集中した。

結果は、まだわからないが、『不可』はないと思う。

テスト期間が終わると飲み会開催のメールが来た。

前回から今日までの間に、

二通ほど飲み会の日程を知らせるメールが届いたが、
おそらくテスト期間中のせいでのせいでは少なかつたのではないか、
と勝手に判断していた。

アヤカの事が頭にあつたが、間隔が空いていた事もあり、
久し振りに参加してみようかという気になつた。

もう八月に入つていて、

その第一金曜日がメールに書かれていた日付だ。
予定がないのを確認してから参加の返事をする。
本当は、返事なんてしなくて良かつたのだが、
不参加が続いていたので念の為という気持ちだつた。

バイトと卒論の仕上げに追われて、

その日までは、あつという間に過ぎた。

金曜日に、いつもの場所に行くと馴染みの顔がいた。
何人かと簡単な挨拶をする。

暫く参加しなかつた事について聞かれなかつたので、予想通り殆どの人は参加しなかつたんじゃないかと思つた。

人々、参加が強制ではない集まりだから、

久し振りに顔を見た人間がいても、それを詮索するような人はいない、

という理由もあるだろう。

見回したが、エリの姿もアヤカの姿も見えなかつた。

今日の参加者は十人ほど。

若干、少なめ、という気がした。

皆どこか旅行にでも行つてゐるのだろうか。

店に移動して、好き勝手に話し出す。

話題の多くは夏休みの過ごし方についてだつた。

学校関係の話題だと、やはり卒論絡みになる。

飲み始めて三十分くらいしたらエリとアヤカが一緒に來た。

アヤカは俺を見付けると、隣に座つて「久し振り」と言つた。

俺も返事をする。

エリとも同じように挨拶して三人が囲むような形で話し出すと、アヤカはまるで、この間の事なんかなかつたかのように接してくる。俺は、彼女達の顔を見た時から、どう応対しようか迷つていたが、その迷いを踏み潰すような勢いだつた。

その勢いと、酒の力と、周りの雰囲気と、テストが終わつた解放感とで、

俺は次第に細かい事なんて考へてゐるのが馬鹿らしい、と思えてきた。

他の参加者も同じだつたのかもしねり。

その日の飲み会は少人数ながら、

なかなかの盛り上がりを見せたからだ。

夏休みやテスト後、それから進路決定。

こういつたキーワードが、

その日の盛り上がりを助長していたように思つ。

そんな中、何かの弾みでアヤカがこんな事を言い出した。

「俺くん、飲み比べをしようよ」

正直、俺は、食べ比べとか飲み比べみたいな飲食での競争に、あまり興味がなかつた。

最初は楽しくても終わつた後には不快感が残るだけだ、というのが経験上わかつていたからだ。

だけど、その時は、

何故か彼女の提案を受けて立とう、という気になつた。

二人の目の前に同じジョッキが並べられる。

ビールの大だ。

御互い顔を見合わせ、意思確認の後、ジョッキに手を伸ばす。ルールは、両者が同じ飲み物を頼む。

飲む速度は関係ない。

両者が飲み終わつてから次の注文をする。

つまり、どちらかが飲み残しのある内は次の注文はしない。それを続けていつて、片方が飲めなくなるかギブアップするまで続ける。

という具合に決まった。

話し合つて短時間で決めた即席のルールにしては上出来だと思つ。前半は御互い快調だつた。

次々に注文を繰り返す。

周りは俺達に、殆ど無関心だつた。

飲み比べをしているのは知つてゐるが、特別興味はない、という様子だ。

一氣とかをする訳ではなかつたし、

飲むスピードを比べる訳でもなかつたので、盛り上がりに欠けたせいかもしれない。

時々、俺達の注文の早さに横目で見る人がいた程度だ。正に一人だけの闘い、という気がする。

エリは立会人のような態度で、マイペースに飲み物を注文した。

その日は、結局、何杯飲んだだろう。

覚えていない。

ただ俺が先にギブアップしたのは覚えている。

これ以上飲むと、帰りに支障をきたしそうな気がしたからだ。

それに、負け惜しみではないが、

こんな勝負に負けても悔しくないし、何か賭けをしている訳でもない。

必死に勝たなくてはいけない気持ちは最初からなかつた。
単なる余興というか御遊びの範疇を出ない。

それでもアヤカは、俺が降参すると勝ち誇った表情を見せた。

「あたしの、勝一ちー」

エリと二人で「すごいねー」なんて持ち上げた。

すると、更に気を良くして彼女は続けて飲んでいく。

勝負が終わつたんだから、

もういいだろう、と思ったが、逆に、止める理由もない。

それから一時間もすると会は終わつたが、

アヤカは気付くと、いつものように寝てしまつっていた。

俺は前回の反省もあるし、今回こそは見捨ててこいつとしたが、

エリがいるので、そういう訳にもいかず
再び手伝わされる羽目になつた。

アヤカを背負つて駅まで行くのも慣れたものだ。

電車は空いていて彼女を座らせて、その両側に俺とエリが座る。
そうして、同じように家まで送り届けた。

玄関で何とか彼女を起こし、一人で駅まで戻る。

ここまで世話を掛けさせられると、急に理不尽な思いがしてくる。
何でもいいから見返りみたいなものを心が欲しているみたいだ。
何かないだろうか？

無意味な送迎を何度も繰り返させられて、

自分にとつて何も収穫がないのは納得がいかなかつた。だからと言つて前回のようないいなのは御免だが、

金でも取ろうかと冗談交じりに言いたくなつた。

要するに、誰かに愚痴を言いたい気持ちが湧いてきたのだ。

そんな思いがあつて、俺はエリに訊いてみる。

「さんつて何で、あんなに酔っ払うんですかね？」

エリもアヤカも俺と同じ学年だったが、

飲み会では新参者なので

話す時は大体、敬語か丁寧語が普通だつた。

決して彼女達が先輩ではないし偉い訳でもない。もっと馴れ馴れしくてもいいのかもしれないけど、ただ何となく、そうした方が無難な気がしただけだ。それを、その時、エリに指摘された。

「俺くんさあ……、別に敬語とかじゃなくていいからね」優しく言い聞かせるような口調の後、フォローするように付け足した。

「まあ、私は、そういうの嫌いじゃないけどね……」その言葉自体は嬉しかつたが、

何か俺の質問をはぐらかされたような気になつて、似たような問いを重ねて、した。

彼女は黙つて歩いていて、

その返事が来るまでに、たっぷり百歩はかかつただろう。そうして、やつと彼女が口を開いた。

「私から聞いたつて言わないでくれる?」

よく意味がわからなかつたが、

それが俺への答えになるなら、と黙つて頷いた。

「さんつて、わかるよね?」

その名前は知つている。

サークルの主催者の友人だ。

髪の長い、物静かな感じの男で、

飲み会では、大体、主催者の隣で飲んでいる。

容貌は文系男子という感じで眼鏡が似合いそうだった。勿論、それは俺の勝手なイメージで眼鏡はしていない。確か、彼も四年だったはずだ。

どこの学部だか忘れたが、俺と同じ大学にいる。

話した事はないが、控えめで悪い印象は受けなかつた。

「わかるけど？」

「たぶん……アヤは、彼の事が好きなんだと思う」

それからエリはアヤカの好みが彼に近い事などを話し出した。

それを聞くと、

彼が、彼女の好みのタイプと合致しているのは、よくわかるのだが、それと彼女が酔っ払う事と、どう繋がるのかわからない。俺は、その点を訊いた。

「前にや……こういう事があつてね」

エリは、ゆっくりと順序立てて話し出した。

それによると、俺が参加する以前に、

サークルの飲み会で酔い潰れた子がいたらしい。

その子は、俺とは違う大学の二年生で、

髪が長く清楚な雰囲気があり、その時が飲み会初参加だった。初々しさが災いして、

何も勝手がわからず勧められるままに酒を飲み過ぎてしまつたようだ。

明るい子だったから、

積極的に色んな人から話しかけられていたせいもあるかもしけないし、

酒を断らない様子だったのもいけなかつたのかもしけない。とにかく色んな要因があつて、

その子はアヤカのように酔い潰れてしまつたらしい。

その子を連れてきた友人は女の子だったから、どうしようか困っていた時に、

さつき話に出た主催者の友人が送つていくと名乗り出たらしく。

酔い潰れた子を背負つて、

その子の友人の案内で家まで運んで行つたようだ。

俺は、それを聞いて可笑しなつた。

(まるで今の俺達じやないか)

エリは言つた。

それ以降、アヤカが酔い潰れる機会が増えた気がする、と。エリの推測によると、

おそらくアヤカは、サークルの飲み会で酔い潰れれば、その子と同じように彼が送つていつてくれるのではないか、と考えているんじやないか、と。

だから、そうして、わざと隙を見せているんだと思つ。彼女なりのきっかけ作りなんじやないだらうか。

そんな事を言つた。

「でも……こうして俺達が送つちやつてますよね」

「そうなの」

エリは困つたような調子だ。

「私も最初は、そんな事わからなかつたから、無理矢理、連れて帰つちゃつたのよね。

で、その時は、何か嫌な事でもあつたのかな?

くらいにしか考えてなかつたんだけど、

次も、その次も寝てしまふくらい飲んで……

これは変だつて思うじやない。

やつぱり急に潰れる回数が増えた訳だし……」

俺は、アヤカを置いてエリが先に帰つてはどうづか?と訊いた。

「そうなんだけど、それも心配だし……」

エリは、そこで立ち止まつた。

「こここのサークルは比較的健全だからさ、あまり変な人いなけれど、それでも酔つた女の子一人残していくのは心配なんだよね」

「確かに、そうですね」

「その彼が送つてくれる保証はないしさ」「じゃあ、エリがいない時はどうするのだろう？」

アヤカ一人で来る時もあるだろ？。

「それは、ないよ」

エリは俺の疑問を否定した。

飲み会に参加する時は、一人で来るようにしている、と言った。

「えつ……でも……」

俺は、前回一人で彼女を家まで送つていった事をエリに話した。当然、部屋に入つてからの部分は削つて簡潔に説明する。

「えーー、そうなのー？」

エリは、それを聞くと驚いて、

それから、俺が一人で送り届けた事に対して礼を言った。

俺は気恥ずかしいような思いがした。

そうして並んで歩きながら、

他にも、御互いの頭に浮かんだ彼女の言動に対する細かい疑問点なんかを話し合つた。

「だからさ……」

エリは俺に、こんな御願いをした。

今、話したのは全部私の推測だけど、多分間違つてないと思う。そうだとすると、もし万が一、

アヤカの担当の彼が彼女を心配するような素振りを見せたり、送つていくような感じがしたら放つておいて欲しい。

それが意味のある事には思えないけど、

彼女は、それを願つているだろうから間接的に協力してあげて欲しい。

俺は、反対する理由もないでの素直に頷いた。

そうして話していたら、

もう駅が目の前に来つていて、俺達は揃つて電車に乗つた。

「そう言えば、その最初に酔い潰れた子つて今もいるんですか？」

俺は、何となく頭に浮かんだ事を訊いた。

「最近、見ないわね」

「何かあつたんですか？」

「そうじやないわよ。

それって結構、前の話つていうのもあるし、

一度で来なくなる子も多いしね。珍しい事じやないわ

「もう長いんですか？」

エリの口振りから

サークルでのキャリアが長そうな気がしたので、そう訊いた。

「一年くらいかな。アヤも一緒に」

そんな話をしていたら俺の降りる駅に着いた。

エリとの別れ際の挨拶が、

前よりも親しみのこもったもののようを感じて少し嬉しくなった。

4

それから九月に入るまで、エリにもアヤ力にも会っていない。
俺は、その一ヶ月を卒論とバイトに費やしていた。

大体、八対二くらいの割合で、

卒論の合間にバイトをしていた、という感じだ。

時々、大学図書館に行つたりもした。

俺は大学近くで一人暮らしをしていたから、

買い物とか家事とか日常の雑事をこなしていく間の、
ふとした瞬間に彼女達を思い出す時もあった。

八月の別れ際に、

エリと話した内容が、時間の経過に従つて、

湧き出すように幾つかの新たな疑問を

俺の中に提出してきたのが原因だった。

それらは、例えば、

三回目の飲み会の日、もし俺がいなかつたら、

エリはどうやってアヤカを連れ帰ったのだろう、とか

五回目の時に、俺がいなかつたら、

それでもアヤカは酔い潰れたのだろうか、
などという頭の隅から不意に湧いたもので、
且つ、答えの出ない疑問であつたから、
俺は、すぐに考えるのを止めてしまった。
それでも忘れた頃に繰り返し、

それらの疑問は脳裏に浮かんできた。
この夏を振り返って、思い出されるのは、
卒論ばかりに取り組んでいた、という事と
今年は田舎に帰らなかつたな、という事くらいだ。
出来れば帰省した方がいいのだが、
家でも、こちらの事情を酌んでくれて、
あまりつるさんく帰つて来い、とは言わなかつた。

そうして、後期も始まる頃には卒論も田途がついてきて、
飲み会に参加する余裕も出来てきた。

九月の中旬。

いつもの駅前で集合すると懐かしい顔ぶれがあつて、
その中にエリもアヤカもいた。

エリは少し髪が伸びていた。

アヤカの方は更に髪を巻いている。

一人とも若干、陽に焼けて肌が黒く見えた。

俺達は久し振りに再会した友人みたいに話し合つた。
店に入つても三人で固まつていて、

この一ヶ月の間に起こつた平凡な日々を語り合つた。
ただ、俺は平常心でいられなくて、

アヤカに気付かれないように、時々、主催者の方を盗み見たりした。
その男は、今日も来ていて主催者と談笑している。
俺達の席とは五メートルほど距離があつた。

そうしていたら、アヤカは、久し振りに飲み比べをしよう、と言つ。

俺は、最初、断つた。

彼の目の前で、俺と二人だけで、そういう事をするのが、アヤカにとつて好ましくない結果を招くような気がしたからだ。しかし、彼女は譲らなかつた。

勝手に店員を呼び止め、同じ飲み物を二つ注文する。暫くすると、目の前に同じグラスが二つ並んでいた。

俺は、どうしたらいいのかわからなかつたが、

彼女は「さあ、かかつてきまえ」

と言つてジョッキを持ち上げて待つていて。

エリに目を向けたが、何も言わなかつた。

目だけが『仕方ないわね』と苦笑しているように見える。

俺は、仕方なく、それに付き合つ事にした。

アヤカは嬉しそうにグラスを合わせる。

胸に響くような高い音がした。

それから何杯か飲んだが、

俺は前回よりは大分早い段階でギブアップした。

アヤカは不満そうだつたが、

自分の勝利に満足したような態度を見せる。

そうやつて早い段階で飲み比べを止めたり、

話に集中させて彼女を酔わせないようにしていったので、

今日はアヤカが潰れる事なく、会も御開きの時間になつた。

俺は、安心して席を立つて帰ろうとする

「一緒に帰ろうよ

アヤカが声を掛けてきた。

三人で帰ろうという意味らしい。

と、言つても一緒なのは、精々、一駅だから大した時間じゃない。

わざわざ改まって並んで帰る事もないだろう、

と答える前に、さつと俺の腕を取つて席から引つ張り出す。

三人で駅に向かい、最初に来た電車に乗つた。

店から、アヤカが降りるまでの間に三人でした会話の主な内容は、俺の態度が余所余所しい、という事だった。

「もつと飛び込んで来い

とはアヤカの言葉。

「遠慮してるの？」

とはエリの言葉だ。

「歳下の私達がタメ語なんだから俺くんも、そうしたら？」
と声を揃えて言われた。

学年は同じだが、歳は俺の方が一つ上だ。

二人は歳上から敬語を使われるのが気に入らないらしかった。
それから、こんな事も言われた。

「ほら……試しに『アヤちゃん』って言つて『ごりん』

電車のドアに貼り付けられた広告を背にして
アヤカの猫目が見上げてくる。

「…………アヤちゃん」

「声が小さい！」

「…………アヤちゃん」

「てゆーか『アヤ』でもいいよ

「それは、ちょっと……」

「なんですよ！」

「彼氏とかでもないし……」

俺は、この窮地を通り過ぐすのに必死だった。
アヤカは腰に手を当てる、俺に喰つて掛かってくる。

「てゆーかね、

飲み会の度に家まで送らせるは、
話せば敬語だつていうんじゃね、

何か私達があんたをパシリに使つてゐみたいに見られるでしょ？」
(その通りじゃないか)

内心、そう思つたけど、口では反対の事を言つ。

「そんな事はないんじゃないかな」「何で、そう言い切れるのよ。

違つたら迷惑するのは私達なんだからね」

「迷惑?」

「だつて、そうでしょ?」

こつちは、そんな気、全然ないのに、あんたを良いように使つてるみたいに見られるのよ。どんだけ酷い女だつて話じゃない」

もう、呆れて返す言葉がない。

「……とにかく、例えば、

あんたが私の事を『アヤ』とか『アヤちゃん』とか呼んでいれば、周りの人達は、『あ、あの三人は仲がいいんだな』って思つし、送つてもらつたとしても不自然じやないでしょ?（御前が酔い潰れたりしなければ、いいだけの話じゃないのか?）

（御前が酔い潰れたりしなければ、いいだけの話じゃないのか?）

という反論が沸々と湧いてきたけど黙つていた。
それからも、似た意味の言葉を散々言われた。
要するに、もっと打ち解ける、という事だ。

俺は、

なるべく普通に話すよつにする。

『エリちゃん』『アヤちゃん』と呼ぶよつにする。

など幾つかの要求を突きつけられて、

強引に、それを了承させられた。

他にも、三人で映画に行かないか、といつ話も出た。

当時、話題の映画で、

どこでやつているのかと場所を訊くと、

俺の大学から電車で少し行つた駅にある、

高層ビルの中の映画館だつた。

そこには、以前、行つた事がある。

二人は勝手に盛り上がつて、

その勢いで俺を誘つてきたが、適當な事を言つて断つた。

何て強引な女達だと思つていたのだが、それが彼女達なりの気の遣い方だつたのだな、と後になつて思つた。そうしていたらアヤが降りる駅に着いた。

彼女が降りると、エリと二人だけになった。エリは、それまで口数が少なかつたが、アヤが降りると話しかけてきた。

「今日は、ありがとね」

彼女は俺がアヤに気を遣つっていたのをわかつていたようだ。こうして一人だけになつて話してみると、

エリがアヤを気に掛けているのがよくわかる。

俺は、先月の話を聞いてから飲み会に行くのが不安でもあった。いつその事、

彼女達とは、もう関わらない方がいいのではないか、とも思つた。もし、アヤの気になつているらしい男が、

彼の方でもアヤを気に掛けているなら

俺が近くにいない方が彼女にとつてもいいだろう。

そう考へると、彼女への接し方は難しい。

その頃には、俺は飲み会参加者の常連の間では、彼女達と一緒に仲が良いやうに見られていたから、今更、飲み会に参加して彼女達とは話もしない、

といふのは、あまりに不自然だった。

ならば、飲み会 자체の参加を止めるのが、

一番不自然でないのではないだろうか、

などといふ考へが何度も浮かんできた。

しかし、エリを見ていると、

気を遣わないように振舞う事が気遣いになるという場合もあるのだ、

というのを思い知らされる。

おそらく俺が考へたような事は、既に考へてきたのだろう。

その上で、無関心を装つてアヤの拳動に注意を払つてゐる。

そんな気がした。

そう気付いた時、

俺は今日、初めて、この女を尊敬の目で見ているのを自覚した。
窓の外を流れしていく夜景を眺めていると、彼女は、こんな事を言つた。

「でも……もしかしたら

今日は飲ませてあげた方が良かつたのかもしれない」

少し髪の伸びたエリは何だか大人びていて違う人のようにも見えた。

「どういう事？」

「うーん……まあ色々あるのよ

「色々って？」

彼女の言葉の意味を詳しく訊いてみたかったけど、

車内にアナウンスが流れて俺の降りる駅に着いてしまった。

俺は名残惜しく扉の開くのを待つ。

電車を降りようとした時、彼女が言った。

「また、サークル来てよね

足元に気を付けながら、俺は振り返つて頷いた。

開いた扉越しに見詰め合つ。

それは長い時間、続かなくて、すぐにベルが鳴つて扉が閉まつた。
ゆっくりと電車は走り出す。

俺は、それを見送つてから階段を上がつて改札に向かつた。

十月になった。

後期が始まっているが授業は殆どなく、構内で知り合いに会う機会は減っていた。俺は、相変わらず卒論に取り組んでいて、土日も、大学図書館に足を運んだ。

その日も、日曜日で、
いつものように

午前中から図書館で調べ物やコピーを取つたりしていた。
午後には用事も片付いて、
大学最寄り駅の近くにあるマクドナルドで遅めの昼食を摂る事にした。

二時を過ぎているせいか、店内は空いていた。
窓際の席を選んで座る。

ガラスの向こうに行き交う人を眺めながら、
ハンバーガーを噛り始めた。

夏の暑さはすっかり遠退いて、道行く人達は長袖が多い。
テイクアウトにして公園とかで食べてもいいな、なんて考えていた。
ぼんやりとしながらも半分は卒論の事が頭にあった。
いつの間にかハンバーガーが片付いていて、
残ったコーヒーを飲んでから席を立とうとしていた時、
不意に肩を叩かれて振り向いた。

「やっぱり俺くんだあー」

そう言って、俺の前の席にアヤが座った。

俺は四人掛けの席に座つて隣に鞄を置いていたんだけど、
彼女もそれを真似して鞄を置いた。

シャツにジーンズという今まで見た中では比較的ラフな格好。

彼女は向かい合うと、驚いている俺に構わず、一方的に話しあった。
この近くまで買い物に出で、ちょうど食事が終わつた所。
洋服を行つたけど、いい物が見付からなかつた。

一緒に行つた友達とは食事が終わると別れた。

帰る前に、この近くにある洋服屋に一人で行つてみようと思つてい
る。

その店に向かう途中で、

そここの道を通つたら、外から俺くんの姿が見えた。

などと一気に語りてしまつと、

「で、俺くんは何してんの？」と訊いてきた。

俺は現状を簡単に説明する。

「じゃあ、この後、予定は？」

特別な予定はない、と答えると、飯でも行くか、と言つ出した。

（今、まさに食事中なのに？）

俺は、そう訊き返すと、アヤの行きたい店に寄つて、
駅まで戻つて、電車で、いつも飲んでいる駅まで戻れば、
夕食にもいい時間だろ？、といつた事だ。

彼女の昼食は軽いものだつたし、

俺が今、食べたものも量が多くないから、

少し時間が経てば、お腹が空いてくるんじゃないか、と言つ。
正直な所、何となく気が進まないのもあつたが、
断る尤もらしい理由も思い付かない。

何か口実を考えている内に、彼女は俺の腕を取つて席を立たせる。

「じゃあ、決まりね」

そつと、そつとトレイや「山」を上付けてしまった。

俺は、自分の鞄と彼女の鞄を持って、後を追つ。

「ありがと」

彼女に鞄を渡すと礼を言つて、田舎の店まで俺を案内した。

その店は、マクドナルドから

歩いて二、三分の場所にある小さな個人経営らしい店だった。

彼女は、ほんの五分くらいで見切りをつけてしまい、店を出た。

それから、駅まで戻る道すがら何軒かの店に入った。

それは、洋服屋や雑貨屋で、どれも十分ほどで見終わってしまった。

最後に、駅から一番近い洋服屋を空手で出てくると、

「今日は駄目ね」と言つて不満そうな顔を見せた。

気に入つた物がなかつたらしい。

俺は慰めの言葉を掛けた。

そんな日もあるよ、みたいな感じで。

すると、彼女は俺を見上げる。

「まあ、俺くんが、そう言つなら許してやるか」

それから、俺達は電車に乗つて、

アヤの家の最寄り駅である一つ隣の駅まで行つた。

食事をしたり、酒を飲むという事になれば、

普段、飲み会が行われている駅が便利なのだが、そこは行き慣れているので勝手がわかっている半面、飽きてしまつてもいた。

すると、アヤが、いい店を紹介すると言い出したので、俺は、それに従う事にした。

それがアヤの家の最寄り駅近くにある店だった。

改札を抜けると、先導するように彼女が歩いて行く。

何度も送つて来た時に、

この駅で降りた事はあつたが、彼女の家までの往復だったので、現在、歩いている辺りは殆ど様子がわからない。

彼女の背中を追つて行くと、

何度か角を曲がつた細い通り沿いの店の前で止まつた。木の大きな看板が立てられていて、

そこに毛筆で店名が書いてある。

あちこち寄っていたので、もう五時を過ぎていた。

営業時間を見ると、ちょうど、開店したばかりのようだ。

「いい感じの店だね
「でしょ？」

俺達は揃って店内に入った。

メニューを見ると、和食を中心とした居酒屋という感じ。
鍋物もあつたし、酒の種類も豊富だった。

ビールと幾つかのつまみを頼む。

早い夕食だったが、

歩き回った上に時間が経過したのもあってか、御互い勢いよく食べた。

四人掛けのテーブルを埋め尽くした皿が次々と片付いていく。

俺達は、向かい合って箸を伸ばし合った。

食事中は、彼女の買い物話と大学の話をした。

時々、卒論や研究関係の話になって、

ここは、こうじゃないか、みたいな議論が交わされた。

それから、

彼女が俺の個人的な事を訊いてきたので、それに答えたりした。

出身地や家族構成や趣味などだ。

サークルの話は出なかつた。

俺からもしなかつた。

エリの話も出なかつた。

そんな感じで時間が過ぎた。

彼女は自重しているのか、酒を一、三杯しか飲んでいない。

これは、普段の彼女からすると、想像を絶する少ない量だ。

途中、彼女が提案した飲み比べを、

俺が断つたのも原因かもしね。

それに、あの男がいないから酔う理由もないのだろう、と思つてい

た。

もう大分食事も進んで、あと一品か二品で終わりだらうか、と思つてゐた頃、彼女が俺に言つた。

「ねえ……携帯見せてよ

俺は不審に思つたけど、ポケットから携帯を取り出した。

今まで、何度か思つた事だが、彼女に頼まれると何となく逆らえない。

威圧的だ、といふのではない。

何かあつても何となく許してしまえるような、そんな雰囲氣がある。例え、トラブルに巻き込まれたとしても、あの猫目で「ごめんね」と上目遣いに言われると仕方ないな、って思つてしまつのだ。

だから、だらう。

何度か彼女の家まで送りられる羽田になつても、次に会つた時に謝られれば水に流してしまつていた。愛情とも違つし、憎めない奴、という言葉でも片付かない。きっと、エリの方でも、似たような気持ちを持つてゐるのではないか。

それは、俺の勝手な想像だつたが。

しかし、そうでなければ、エリが、

あれだけアヤの世話をするのが説明出来ないような気がした。

それとも、俺の知らない事情があるのであるのだろうか。

俺が携帯を見せるようにすると、

彼女は素早く対面から手を伸ばして、それを取り上げた。

「おいつ

そつと取り返そうとすると、

俺の届かない所で携帯を触り出した。

「何する気?」

別に見られて困る訳ではなかつたけど、気分のいいものではない。
すると、彼女は含み笑いをして言った。

「私のアドレス入れてあげるよ」

「えつ……」

「何?……何か文句あるの?」

少し睨まる。

僅かに頬が赤い。

「いや、そうじゃないけど……」

（だつたら最初から、そう言えばいいのに……）

心の中で呟いたが、彼女の好きにさせた。

それから、

彼女は俺の携帯のボタンを何度もいじつたりしていたけど、
急に変な声を上げて俺の方を見た。

「何これ?」

「何?なんか変?」

俺は携帯を覗き込むように身を乗り出す。

「あんた、友達いないの?」

憐れむような眼差しを向けてくる。

俺は意味がわからず首を傾げた。

すると、彼女は携帯の画面を俺の方に見せて、言つた。

「だつて、これしか登録ないじゃん」

画面には俺の電話帳が映し出されている。

彼女が言つのは、その登録数が少ないと指摘しているのだ。

「えつとお……実家?とバイト?と……あと男?」

……「れ全部合わせても十件くらいしかないじゃん」

そう言って、頻りに携帯を操作している。

「えつ?……シークレットにしてるとかじゃないよね?」

俺は首を振った。

何度もボタンをいじつていた彼女も、漸く顔を上げた。

「俺くんつて、本当に現代人?」

彼女の瞳が愉快そうに光った。

俺は、その理由を簡単に説明した。

少し前に携帯を失くして、バックアップもなかつた事。
それ以降、新しく知り合つた人が少なく登録する機会もなかつた事。
自分の行動範囲が大学、バイトと狭い事。

それらの理由で、

あまり携帯を使わなくても不便を感じない事などを話していった。
そう言えば、

最近になって、サークルの主催者の男とアドレスを交換したくらいで、

それ以前となると、ちょっとと思い出せない。

俺の話が終わると、彼女は呆れたように笑い出した。

「そりなんだあ……」

いやあ、私さ、こんな登録が少ない人、初めて見たから、
ちょっと驚いちゃつて…………」「めんね」

両手を合わせて軽く頭を下げる。

それから、口の中で何度も「そつかあ」と呟いた。

そして、何度か頷いた後、

「じゃあ、この携帯は、私が女子一号だね」と言つた。

彼女の顔は、

徒競走で一位になつた時のような、ある種の誇らしげな影があつた。
きっと、そんな下らない事でも『第一号』といふ響きに、
何かしら彼女だけがわかる優越感があつたのだろう。

「そうだね」

「俺くん、これからは遠慮なくメールでも電話でもしてきましたまえ

「はいはい」

「……はい。これ私のアドレス入れておいたから、後でメールして

よね

「うん」

「それから、パソコンもあるでしょ？」

「持ってるよ」

「そっちのアドレスも送つておいてね」

「何で？」

「そっちの方がいい場合もあるでしょ。私も後で送るからさ」

「わかった」

俺は、そう約束をして携帯を受け取った。

店を出ると、すっかり暗くなっていた。

夏は、もう遠い昔だ。

念の為、彼女を家まで送つて行った。

何度も通つただけあって慣れたものだ。

きっと、案内なしでも彼女の家まで楽に辿り着けるだらう。少なくとも彼女の家から駅までは絶対に迷わない自信があった。

「ここで、いいよ」

アパートが見えてくると彼女は、そう言った。

俺は、それに従つて踵を返す。

御互い「さよなら」と言い合つて別れた。

駅への道は人通りが多い。

今まで、この道を通つた時は、もっと遅い時間だったから、こんなに早い時間に、この道を歩いているのが不思議な気がしてくる。

そんな事を考えていたら、いつの間にか駅に着いた。
見上げると、漆黒の高い空がある。

ホームに下りると、すぐに電車が来て、俺は、それに飛び乗った。

アヤからアドレスを渡された次の日に、早速メールを送信した。

件名には、自分の名前を。

内容は携帯のアドレス、電話番号、パソコンのアドレスを書いた。

他には何もない。

至つてシンプルな内容だった。

携帯のアドレスは表示されるだろうから必要なかつたが
念の為、付けておいた。

彼女の返信は、その日の内に来た。

件名、内容とも俺のメールと大差ないものだつた。

ただ、「いつでも連絡したまえ」という言葉と顔文字があつた。
ほんの少しだけ自分の世界が広がつたような気になつたが、
交換したアドレスは、殆ど活用されなかつた。
と、言うのも、俺は相変わらず卒論に取り組んでいたし、
彼女の方も似たような状況みたいだつた。

パソコンの方のアドレスは主に学校関係の連絡などに使つていたか
ら、
時々チェックをしていたけど、彼女からのメールは届いていなかつ
た。

そうしている内に、十一月が終わつて師走になつた。

ここ一ヶ月、サークルの飲み会にも顔を出していなかつたので、
気分転換の意味もあつて参加する事にした。

参加者は十五人程度。

色々忙しいせいか、人は少なく見えた。

アヤはいない代わりに、エリがいた。

遅れてくるのか、と思っていたが、彼女は最後まで来なかつた。
途中で俺は、アヤが来ないのかとエリに訊ねた。

「なーにー？俺くん、気になるの？」

そう言って、にやけながら、今日は来ないよ、と教えてくれた。
どうやら後期に取つた授業のレポートが終わらないみたいだ。
卒業に関わつてくるから終わらせない訳にはいかない。

その日は、エリと二人で話し合った。

彼女の卒論は順調で完成間近な事や単位も問題ない事を聞いた。
どちらかと言うと、アヤの方が心配で、
幾つか落としそうな授業もあるらしかった。

「でも、大丈夫だと思うよ」

あまり危機感がない調子だから、おそらく平気なのだろう。
余裕のあるエリからするとアヤの状態が不安に見えるに違いない。
飲み会に参加した他の人達の話も聞こえた。

一番の話題は

来年度、誰が、このサークルの中心になっていくのか、という事だ
つた。

何人か候補の人間がいるが、

彼等が引き受けなければ、このサークルは終わってしまうだろうし、
仮に引き受けてくれても、

人が集まらなければ続けていくのは難しいだろう。

俺は、皆が集まる目的がない事が、

このサークルの価値だと思っていた。

成人した人間が毎週のように意味もなく集まってきて、

あれこれと好き勝手に語り合う事に意味があると思っていた。
しかし、反対に、

集まる意義もないのに人が集つたって時間の無駄だ、
と言う人間もいるとも思っていた。

だから、このサークルが受け継がれない可能性もあるだろう。
それは仕方ない事だ。

他にも卒業や卒業後の進路に関する話題が出た。

「何となく寂しいね」

エリは交わされる話が、そういう内容ばかりなのを嘆いた。
俺も、それに頷いて同意する。

向かいの彼女を見る。

彼女の髪は会つた頃よりは随分伸びていて、

今は、もう肩に届きそうになっていた。

そのせいで、妙な女らしさを漂わせている。

どちらかと言うと、彼女は、あまり酒を飲む方ではない。酔つて騒いで、というのを嫌っている風でもあった。

だから、こうして二人で飲んでいると、静かな席になる。アヤがいなさいで、余計に落ち着いた雰囲気になった。場も終わりかけになると、俺達は席を立つた。

アヤと、噂の彼が気になつたけど、

最後まで、どちらも姿を見せなかつた。

別れ際、「今度は三人で、どうか行こうよ」とエリが言つた。

俺は、それに頷いて彼女の乗る電車を見送つた。

エリとの約束は、別の形で果たされる事になつた。

師走も半ばを過ぎて、あと一週間で今年も終わるという頃、俺達三人で食事をする計画が持ち上がつた。

三人だけの忘年会という位置付けらしい。

アヤが発案し、それにエリが賛成して俺に話が回つてきた。

俺は、それに賛成だけして計画の殆どを彼女達に任せていた。

日時は一週間後の日曜に決まつた。

約束の日が近付くにつれて、

会場になる店を予約した事や待ち合わせの時間などが、アヤからメールで送られてきた。

直前に一度、

アヤから電話がかかってきて最終的な打ち合わせをした。

当日は、冬らしい日で、気温が低く空には厚い雲がかかっている。午後になつても薄暗い今まで、日差しが地上まで届いてこなかつた。予約をした店は、

アヤの家の最寄り駅から近い場所にあつたので、

彼女の家が集合場所だつた。

俺は、一番遠いエリと途中で合流して、アヤの家に向かい、それから店に行くという段取りになっていた。

約束した時間の電車でエリと合流すると、アヤの家に向かう。もう少しで降りる駅に到着するという頃、エリの携帯が鳴った。

彼女は駅に到着するまで待つて、電車を降りてから掛け直す。

俺はホームの離れた所で電話が終わるのを待っていた。

彼女は通話が終わると、俺に寄つて来て、

済まなそうに電話の内容を説明する。

エリの卒業後の進路は、大学院に決まっていた。

試験の結果も出て、幾つかの手続きも終えて、

あとは、自分の研究を続けていけばいい、という状態だったようだ。

その担当教官からの電話で、

研究関係の打ち合わせをしたい、という事らしい。

どうしても年内に決めておきたい事があつたのが、

教官の都合で年内は今日しか余裕がなくなってしまったらしい。

最近では日曜日でも大学に行く事が多い彼女なので、急だが出て来られないか、という話だった。

相談の結果、

エリの用事が済むまで、俺はアヤの家で待つて居た。

一度帰るのも面倒だし、外で待つて居るような気温ではなかつた。

アヤに、その事を連絡して俺達は別れる。

彼女は、もう一度電車に乗つて、

俺は改札を出てアヤの家に向かつた。

アヤの家に着くと、彼女は俺を招き入れる。

玄関までなら何度か入つていたが、こうして上がり込むのは初めてだ。

造りは1DKで、キッチンが広めなのが特徴的だった。

「適当に座つて」

部屋に通されると空いて居るスペースを指して、アヤが言った。

小さなガラステーブルの前に座る。

彼女が淹れてくれた御茶を飲みながら、駅でのエリとのやり取りを、もう一度繰り返してアヤに聞かせた。エリが電話で話してあったはずだが、他に適当な話題も思い付かない。

間を繋げるようにながら、出された御茶を飲んだ。

「まあ……とにかくエリからの連絡待ちだね」

アヤはベッドの端に座つて、床に座る俺を見下ろしている。それから、取りとめもない話をした。

中身があるようで、ないような、軽い話題。

彼女は、雑誌に載っていた洋服の話や見たい映画の話、

年末年始の予定や大学受験を控えている実家の妹の話なんかをした。

俺は、それを聞きながら、ふと前回の飲み会で

アヤの単位が厳しいみたいな話をエリから聞いていたのを思い出したので、

その辺がどうなっているのか尋ねた。

「うん、大丈夫……」

「あ、よかつたね」

「……と、思う」

（思ひ、かよ！）

俺は心の中で突っ込んだ。

「あー、でもホントに大丈夫だと思うよ、うん」

彼女は何度か頭を搔いて、「心配かけて」「めん」と言つた。

そうやって一時間くらい話をしていく、

エリからの連絡を待ち侘びていた頃、アヤの携帯が鳴った。正直、話題も尽きかけていた頃だから、

携帯が鳴つて「エリだ」とアヤが言つた時には助かった思いがした。

彼女は通話を始めると何度も頷いた後に一瞬驚いて、

それから「ちょっと訊いてみる」と言つて、俺の方を向いた。

「なんか……まだ、結構かかりそなんだつて……」

「あ、そななんだ……どれくらい?」

「ちょっと、はつきり、わからぬいくらいなんだけど……」

「うん」

「で……なんか雪も降つてきるらしく」

「えつ?」

俺は、反射的に窓の方を向いた。

彼女は立ち上がって窓に近付きカーテンを開いた。

俺も傍に寄つて一人で空を見上げると、

確かに白いものがちらちらと降つてきているのが見える。

「ホントだ……」

無意識に呟いた。

「だから、申し訳ないけど延期に出来ないか?って言つてるんだけど

ど

相談の結果、Hリの提案を受け入れて、今日の予定は止める事にした。

予約した店にはアヤの方から連絡を入れておく、といつ事で電話を切つた。

「せつかく決めたのにね」

残念そうに溜息をつく彼女。

「まあ仕方ないよ」

俺は慰めるように言つと、頭の中で今後の予定を検討し直した。

今日は夕食を外で済ますつもりだったから、自宅には何も用意しない。

帰りに何かを買つていくか、どこかで食べていくか、どうじょつか迷つていたら、「何か取ろうか?」と彼女が訊いてきた。

雪が降つていてるから、すぐ帰るよりは様子を見た方がいいし、自分も、これから夕食のつもりだったからお腹は空いているし、何も買い置きがないし、それだったら天候を窺いながら、何か頼んで一緒に食べていいか?という事だった。

「雪はどうなのかなあ？」

その意見には賛成だつたが、これから更に雪が降り続くようだつたら、

すぐに帰つた方がいいんじゃないだろうか。

「ちょっと待つてて」

彼女は、テーブルにあつたパソコンを起動させた。

暫く待つていると静かなファンの音がしてデスクトップが現われる。壁紙は子猫の画像だつた。

灰色で縞模様の猫達が可愛らしく転がつてている。

ネットに繋ぐと、

天気予報のページを開いて、気象情報を確かめ始めた。

「うーん、『所によつて雨または雪』つてなつてるから、暫く待つていれば止むんじやないかな？」

「そう？」

「うん、どっちにしても明日には晴れるみたいだし、これを見る限りは一時的っぽいけどね」

結局、天気予報と彼女を信じて、

暫く、ここで待機させてもらひつ事になつた。

「何にしようか？」

彼女は、どこかからパンフレットみたいな物を出してきて俺に見せた。

それはピザ屋の広告で、俺達は一、三人前のピザを一つ頼んだ。

飲み物は彼女が用意して、ピザが届くのを待つた。

ピザは三十分で来なかつたが、天候の割りには早く届いたと思つ。配達の男は現金を受け取ると、寒そうに出て行つた。

それから、

彼女が淹れてくれた紅茶を飲みながら一切れずつ食べ始めた。

少し食べてから、カップに手を伸ばして一口飲むと、変な香がした。

「これ、何か入れた？」

俺が問うと、彼女は俺と同じように一口飲んでから、それに答えた。

「焼酎割りです」

「いや、普通のでいいんだけど」

「あつたまるかな、と思ってね」

「充分あつたかいし」

ピザを頼む頃には、

彼女の部屋で落ち着いていく方向で話が決まっていたので、エアコンをつけてカーテンを閉めていた。

陽は落ちて気温が下がってきていたが部屋の中は暖かく、俺の着てきたダウンは部屋の隅で丸まっていた。

その上、焼酎割りだ。

暑くなつて、二人とも上着を一枚脱いだ。

意外に、酒とピザの相性が良くて、

俺達には量が多いと思われたピザは簡単に片付いてしまった。

空き箱を片付けて、食後にもう一杯紅茶を出してもらう。

今度も焼酎割りだ。

「今日、残念だつたね」

彼女は俺に、そう言つて予定の変更を悔しがつた。

「でも、また今度があるよ」

「そうだね」

それから、三十分くらい、エリの話や大学の話をしていた。ふと、外の様子が気になつて見てみると、まだ雪が降つていて、うつすらと道路に積もりつつある、という感じだった。心なしか、さつきよりも粒が大きい気がする。

窓の傍から振り向いて報告する。

「まだ降つてるね」

「そう……」

彼女は気のなさそうな様子で、何となく上の空だ。ベッドで足を組みながら足元に視線を向けていた。カーテンを戻して、元の位置に座り直す。

俺は、どちらにしても、

そろそろ帰った方がいいんじゃないか、といつ氣になっていた。
アヤにも都合があるだろ？し、全く帰れないという天候でもなかつた。

電車も止まつていないと思つ。

今日の事は残念だったが、

彼女にも言つたように次の機会もあるだろ？
それを、いつ切り出そうかと考えていた時に、
彼女は俺に変な事を訊いてきた。

「俺くんつてや……彼女いないよね？」

何の脈絡もない突然の発言に意表を突かれた。

戸惑いながらも反射的に頷く。

すると、彼女は俺の携帯の登録状況から、そう判断した、と言つた。
なるほど。

内心、納得する。

しかし、だからって、それがどうしたというのだろう？

彼女の次の言葉は、それに続く内容が来るものと予期していたが、
予想に反して全く関係のない問いを俺に投げ掛けてきた。

「私つて……女として見れないかな？」

「は？」

「だから……例えば、よ。

例えば……私が俺くんに付き合つて……とか言つたら、どうする？

「考えた事もないし……」

「そこを考えてよ」

「うーん…………わからなーいなあ

戸惑っている俺に、彼女は詰め寄る。

「じゃあさ、…………じゃあ今、こつして部屋に一人でいるじゃない？」

「うん」

「こつ……何か感じたりしない？」

「何かつて？」

「だから……ムラムラッとか、襲いたくなったりとか……」

「いや、殴られそうだし……」

俺の冗談に彼女は笑わなかつた。

彼女は一度、小さな溜息をついた後、

カップを傍に置いて身を乗り出すように語り出す。

そこからは、俺に対する言葉が更に直截的になつて、最近ヤツタのはいつだ、とか私に魅力を感じないのか、とか、どういう女が好みなんだ、とかいう質問攻めになつた。

俺は何とか誤魔化して、それらの質問を交わしていたが、業を煮やしたように彼女はベッドを降りて、俺に近付いてきた。

そして、

胡坐をかいて座っている俺の正面に腰を下ろすと、両手を俺の肩に回して顔を覗き込んできた。

外出する予定だつたから、

彼女の服装はジーンズにシャツという格好だつたのだが、その上着を脱いだ為、今、着ているのは薄い長袖だけだつた。しかも襟元は大きく開いていて、

そんな風に向かい合つて下から見上げられると、自然と胸の谷間が覗けてしまう。

「どうなの？」

更に、彼女は見詰めながら問い掛けてくる。

背中に回された両手は絞られるように縮んできて、

そうすると俺と彼女の距離は次第に埋められていつた。

もう御互いの顔は目の前で、膝元は密着しているし、

俺が手を伸ばして抱き寄せれば、簡単にキスが出来そうな体勢だつた。

形は違つても、あの日、初めてキスした時の情景が思い起こされた。

彼女の魅力の有無を問われれば、否定的な意見は出るはずもない。

それは、こうして間近に迫られなくとも充分に伝わってきた。

しかし、

女性的な魅力と対象の好悪は比例しないのではないだらうか。美しいものを全て好きになるとは限らないように、醜いものを全て嫌うとも限らなかつた。

彼女に女性的な魅力がある事と、

俺が女性として彼女を見るかどうか、という事は別問題のように思う。

それ有何とか言葉にして伝えたい、と思つた。

しかし、それを上手く、簡潔に伝えるような言葉を思い付かない。下手な表現をして誤解されるのを、俺は恐れた。

どこからか、いい匂いがする。

ウエーブした長い髪か、首筋か、それとも回された両手からなのか。その香は一人の周囲を取り巻いて、絡みつくように拘束するように、俺に迫つてくるように感じられた。

蜘蛛の巣に捕らわれた蝶の姿が頭に浮かぶ。

前を見ると、彼女の瞳が、こちらを見返している。

その瞳は蜘蛛よりも美しく、俺は射竦められたような思いがした。

そうして、どれくらい無言の時間が過ぎたのかわからなかつたが、俺は、やつと彼女に反撃出来るだけの言葉を見付けた。

「アヤちゃんは、好きな人がいるんだろ?」

なるべく胸元を見ないように言つたので、

結果的に彼女を睨むような形になつてしまつた。

「何が?」

彼女は最初、意味がわからない、という顔をした。

俺は、そのあからさまな惚けぶりが気に入らなくて、似たような言葉を繰り返した。

なるべくエリから聞いた話とはわからないように、

ぼかしたり、こつちは何となくわかっているんだ、という態度を見せながら、エリからされた男の話をした。

その話を聞いた時から、もう大分、時間が経つていたが、

かなりの部分を正確に思い出す事が出来た。

話の後に、驚くアヤの姿が目に浮かぶ。

しかし、それを黙つて聞いていた彼女は、

俺の話が終わると、呆れたような顔を見せた。

「それ……きっと、エリから聞いたんじゃないの？」

そこまで、はつきりと言われば否定もじづらいので、そうだ、と認めた。

見詰め合つ二人。

まだ外で雪の降る音が聞こえた。

すると、彼女は一瞬の後に、

「もう、とっくにフラれたから」と切り捨てるような口調で言った。それがあまりにも冷たく投げ捨てるような言い方だったので、内容よりも、その口振りに驚いてしまった。

「そうなの？」

「うん」

「いつ頃？」

「んー、忘れたけど、三ヶ月くらい前かなあ……」

それから、彼女は俺に、彼との事を話し始めた。

ある日のサークルで、飲み会に行つたらエリも俺もいなかつた事。

何度も告白しよう、

と思っていたけどチャンスがなかつたので言えずにいた事。

その日、勇気を出して、
彼が飲み会の席を外した時に追いかけて、告白した事。

そして、断られた事。

その時から、もう二ヶ月以上経つてゐるせいか、

終始、淡々とした調子で彼女は語つた。

俺は上手い言葉が見付からなくて、黙つて彼女の話を聞いていた。
慰めた方がいいのか、

それとも彼に対しても怒つた方がいいのか、よくわからなかつた。

そうして、彼女は最後まで語り終えたらしい所で、黙つた。

雪のせいなのか、相変わらず静かで、

部屋の上部ではエアコンが乾いた音を立てて温風を吐き出している。

「私の話は終わりだけど、俺くんの答えは、いつ聞かせてくれるのかな？」

俺が俯いていると、彼女は首を傾げながら訊いてくる。

俺は、暫く、そのままでいたが、

彼女はもう一度、俺の鼻先まで顔を近付けてきて、

「私って女として見られない？」

と同じ質問をした。

それでも俺は黙つて、湧いてくる色々な感情を処理し続けていたけど、

やがて決心して、さつき彼女に対して抱いた感情を順番に話し出した。

彼女に魅力がある事や、

女として見られない訳がない、という意味の事を言った。

なるべく誤解がないように、

言葉が足りないと感じたら何度も同じ所を繰り返した。

そうして、話しながら、

これだけ彼女の魅力を語れるのに、それでも、

俺が彼女を女として見られないような理由は何だろう?と考え続けた。

しかし、一方で俺は、それが表面的なものだと感じている。

本当は、真の理由に気付いているのに、

あえて、それに気付かない振りをして

必死で別の理由を探しているのだ。

もつと、他人が納得出来る理由。

もつと、奥底にある自分を誤魔化せる理由。

そんな理由を探しているのだ。

俺が彼女を女として見られない理由。

それは。

きっと、それは、気になる人がいるからだろ？

心の底に沈殿したように残つてゐる面影があるからだろ？

最後に、俺は、その人の話をした。

それは、もう何年か前の出来事だつたから、まるで、どこかの倉庫に仕舞つておいて埃のかぶつたような感情を、そつと取り出して披露するように……、凍り切つた情熱の塊を静かに解凍して蘇らせるように……、ゆっくりと彼女に対して語り出した。

その人の事、その人との出会い、

俺が如何に、その人を好きだつたか、その人を大事に思つていたか。そして現在、どういう状況にあるのか。

それらを簡潔に纏めて、彼女に話し出した。

今まで誰にも、そんな話をした事はなかつたけど、そうする事が彼女に対しての礼儀のような気がした。

彼女は黙つて俺の話を聞いていたが、

俺が黙ると、「それで、おしまい？」と訊いてきた。
俺は小さく頷いた。

そう言えば……この時期だつたな。

彼女に話した事で、改めて古い記憶が呼び覚ました。まるで、自分が昔に戻つたような感じで、あの子の存在をこれほど身近に感じたのは、ここ最近ではなかつた事だつた。

「ふーん……、俺くんにも、そんな事があつたんだね」

彼女は、そう言つて立ち上がる。

傍のテーブルに置いてあつた二人のカップを取り上げて、すっかり冷めた御茶を淹れ直してくる。

数分間、部屋は沈黙に包まれて、

何もかもが活動を停止したみたいになった。

彼女は戻ってきて、俺の傍に一人分のカップを置くと、

また俺に寄り添うような、元の体勢に戻った。

「でもさあー」再び俺の肩に手を回してくる。

「俺くんは、その人と今も連絡、取つてると？」

俺は否定した。

「じゃあ、何か関係が改善されるような努力をしてる？」

それにも首を振った。

「じゃあさ、冷たいようだけど、諦めた方がいいんじゃないかな？」

彼女の口調はとても優しくて、

他人事ではなく、俺の中の、どこかに沁みてくるような感じがした。

「ちょっと残酷だけど、

俺くんの言つ話が本当なら、結構可愛いんでしょ？その子

俺は、そこで初めて頷いた。

「だったら、もう次の人を見付かつてんじやないかな。

女人の人は、ただでさえ過去を振り返らない所があるから、

三ヶ月とか下手すると一ヶ月とかでも

次の人につっちゃうつて場合も普通にあると思うし……。

その上、見た目もいいなら、

例え、その彼女さんが、そういう気持ちじやなかつたとしても、

きっと周りが放つておかないと思うんだよね

彼女の言つ通りだ。

もう、それは何回も頭の中で考えてきた事だった。

ずっと、繰り返し考え続けてきた。

だから……。

『そんな事は、わかっている』と言い返したかった。

でも、一方で、

俺は誰かに、そう言って欲しかったのかもしれない、

という思いも浮かんだ。

過ぎ去ってしまった、

どうにもならない事にしがみ付いている自分を誰かに叱つて欲しい。みつともない、と蔑んで欲しい。

終わった事だと諦めさせて欲しい。

その気持ちは、彼女に言われるまで、ずっと隠されていて、
その時になつて初めて氣付かされた自分の秘めた欲求のよつた気が
した。

「私も最近、色々考えたけど、

一人の人に決め付ける必要なんてないんじゃないか、って思うよ。
今の私が言つても振られた女の強がりにしか聞こえないだろうけど、
結構自分に合う人つて探せば見付かるものだし、

最初は嫌つても、会つてている内に段々、

この人とは仲良くなれるかも……って思う時あるでしょ？」

彼女はカップに手を伸ばす。

そして、一口飲んだ。

「だから……どんな人が自分に合うかなんてわからない訳だし、
色んな人と付き合いを広げていって
気長に自分に合う人を探していくばいいんじやないかな」

「そうだね……」

俺も彼女に合わせて紅茶を飲んだ。

二人とも黙り込む。

俺は言いたい事を言つてしまつた。

彼女も同じだろう。

そうしていると、彼女は俺を見て笑いながら言つた。

「私達……、フラれた者同士だね」

その言い方が何となく面白くて、俺も微笑む。

悔しさとか惨めさとかは彼女にはなかつただろうし、俺にもなかつ
た。

あえて言つなら、御互いの心情を吐露する事で、

一つの区切りを付けようとするみたいな

二人の意志が、そこにあつたように感じた。

「まあ……ね、仕方ない事もあるよね」

彼女は俺に伸ばした腕を置るように巻き付ける。

そうすると、

俺との間に出来た空間が狭まつて、一層、彼女の顔が近付いた。

何か言うのかと思って、黙つていると、

彼女は、そのまま目を閉じて俺にキスをしてきた。避ける間もなかつた。

柔らかい唇が押し当てられる。

彼女の香が一段と強くなつて、それに魅了されひつゝな、陶然としたような気持ちになりかけた所で、ゆっくりと唇が離れていった。

それから、口の中で小さく笑つてから、彼女は俺に囁いた。

「これで……もう忘れようよ」

「何を？」

「御互いの相手を」

「忘れ……られるの？」

「うん」口の端を上げる。「大丈夫。……だつて別の人と、こんな事しておいて、今更あの人を好きだ、とか言えないでしょ？」確かに、その通りかもしけない。

納得しそうになつた瞬間、ある場面が頭に浮かんだ。

「でも……俺にしたじやん」

「何を？」

俺は初めて彼女とキスした時の状況を話し出した。

「あの時は彼の事、好きだつたんでしょ？」

「んーー、あの時は、ヤケになつてた時期だつたから

「何で？」

「なんか……告白するチャンスとか勇気とかがなくてイラライラして

た

「そつか……」

「でも、今は、あの頃とは違ひし」

「そうかもね」

「だから……俺くんも……いいよ」

長い睫毛が伏せられた。

「何が、いいの？」

俺が訊くと、彼女はすぐに口を開いて怒ったように呟つ。「だからー、私がアイツを忘れる為に、今、したでしょ？だから今度は俺くんの番だよ」

つまり、同じ事をしろ、と。

「いや、俺はいいよ……。もう忘れたとかじゃないし」「じゃあ、その人の事、もう気にならない？」

「…………うん」

それは、本当に自分の本心だつただろうか？

今、考へても、よくわからない。

「じゃあ、余計に大丈夫じゃん」

「どうして？」

「だつて、まだ氣になつてるならマズイけど、

何とも思つてないなら、私としても平氣でしょ？」

「んー」

そうかもしね。

御互い恋人もいなく好きな人もいないなら、

ここで俺が彼女とキスをしても誰にも咎められないはずだ。理屈としては通つている。

俺は迷つた末に、彼女の唇に顔を寄せキスをした。

それは、瞬間に触れ合つ、鳥のようなキスで、

俺が離れてしまつと、彼女は露骨に不満そうな顔をした。

「そんなんで、忘れたつて言えるの？」

苦笑いする俺を睨みつける。

「それとも……私どじや、できない？女として見れない？」
二度目だ。

もう、同じ言葉を今日だけで、三回聞いている。

もしかして、俺のこうした態度は、

彼女の自尊心を酷く傷つけているのかもしれないなかつた。

はっきりとは言わないけど、

彼女は内心、思い悩んでいるのかもしれない。

どう言葉を飾つてみても、俺が彼女の要求を拒絶する事は、女性としての彼女を否定する事に等しくなつていやしないか。

そう考えて、俺は漸く決心をした。

彼女の肩を力強く掴むと、そのまま抱き寄せて、キスを返す。

それは一分ほど続いて、

その間、彼女は俺にもたれかかるように身を任せていた。

俺は、ただ、彼女に意識を集中していく、

重なつた唇と、掴んだ両肩に垂れる髪と、

彼女の香の事だけが頭の中を占めていた。

その間、

昔の女の面影は頭から消えていたな、と後から振り返つて思つた。

アヤの部屋でキスをした後は、
二人とも何となく吹っ切れたような、
さっぱりとしたような雰囲気になつた。

例えてみれば、引越しや大掃除をしたような、
念頭にあつた懸念が解消されたような、そんな感じだつた。
二人きりで部屋の中で、となれば、
そのまま肉体的な方向に進みがちだが、
それは、どちらの心にもなかつたように思つ。
そうした欲求を持つほど、

俺達の間に愛情というものは育つてなかつたのではないか。
二人とも捨てきれない

己の感情を振り払うのに懸命だつた、と俺は結論付けている。
頼んだピザを食べ終わつて一時間もしたら
雪が小降りになつてきたようなので、俺は帰り仕度をした。
アヤの部屋にいたのは、三時間程度だつた。

それから、

すぐに大晦日が来て何事もなく年越し、冬休みが終わつた。
アヤからは、一度だけ、
映画に行かないか?というメールが来たが、都合がつかず断つた。
エリとは会つていない。

年が明けると急に時間の流れが速くなつたように感じた。

授業の始まつた大学は、すぐに後期試験を迎えた。

単位に關して、俺は殆ど問題なかつたから、卒業を待つだけだつた。

卒業式が近付くと、

周りは最後の学生生活を惜しむような盛り上がりを見せた。

必要以上に浮き足立つて、

飲み会や打ち上げという名の誘いが来た。

俺は同じ学部の友人やゼミの飲み会を優先させて、

サークルの飲み会には行かなかつた。

この頃は授業もなかつたし、春から仕事に就く為の準備があつて、自分が学生なのか社会人なのか認識しづらい立場だつた。

春になつた。

いつの間にか卒業していて、いつの間にか社会人になつていた。

四月から六月の三ヶ月間の記憶は、殆どない。

あの頃は何をしていたのだろうか。

覚えていない。

思い返そうとしても思い出せない。

不思議だ。

残つているのは、ほんの断片的な記憶だけで、それを、どう繋ぎ合わせても

当時の自分を再生出来そには思えなかつた。

職場と家を往復して、仕事に慣れる事で精一杯だつたし、もしかしたら、毎日、同じ事を繰り返していただけで、記憶が圧縮されているのかもしれない。

仕事を始めた事で、自分の行動範囲が変化した。職場と大学は方向が全く違つていたから

住んでいる場所は変わらないのに、

それまで会つていた人に会わなくなつたし、

行つた事のない場所に行くよくなつた。

エリにもアヤにも会つていない。

それどころか、大学時代の知り合いとは誰とも会わなかつた。

ある日の仕事帰り。

夕食を摂ろうと立ち寄った店で、

大学時代のバイト仲間と偶然再会した。

彼も社会人になっていて、

懐かしい思い出話をしながら連絡先を交換した。

近況を語り合つと、互いを励ましあつよくな言葉を交わした。

「また会おう」

彼は別れ際に笑顔で言つた。

新しい仕事。

新しい人間関係。

自分を取り巻くものが急激に変化していく。

そんな生活環境や交友範囲の変化は寂しくもあり嬉しくもあった。

新人研修が終わり、夏を迎える頃には、

俺の中に多少の余裕が生まれるようになつた。

相変わらず忙しい毎日だったけど、

おそらく、体の方が慣れてきたのだろう。

七月下旬。

エリからメールが来た。

話したい事があるので、少し時間を作つてほしい、という内容だつた。

何度も連絡を取り、約束の日を決めた。

八月に入ったばかりの土曜日は半袖でも足りないくらいの暑さで、
陽が落ちても、そこら中に熱気が満ちていた。

エリとの約束の五分前に待ち合わせ場所に着くと、

彼女は既に来て、俺を待つていた。

彼女と会うのは、もう半年振りで、

メールなどの取り扱いはあつたから全くの音信不通でもなかつたけれど、

「うして面と向かつて半年といつ時間の経過を思い知られた。エリの短かつた髪は、肩にまで届くくらいになつていて、それを縛つて纏めている。

最近になって使い出したのが、

縁の細い赤い眼鏡が彼女をとても知的に見せていた。

飾り気のないノースリーブにジーンズという格好だったのに
女らしい色気を感じる。

待ち合わせたのは彼女の大学に近い場所で、

そこから歩いてすぐのレストラン兼バーみたいな店に入った。
そこは、

昔のアメリカ西部地方みたいなのをイメージしているのだろうか。

内装や店内の小物に、そういう雰囲気が感じられた。

席に着くと、

近況報告のような世間話のような愚痴のような会話が暫く続いた。彼女は大学院に入つてから、昔以上に忙しくなつたみたいで、今日の予定は彼女の都合に合わせて計画されたものだった。会話が一通り済んでしまつと、Hリはアヤの話を持ち出した。

「俺くんつて、最近アヤに会つてる?」

「いや、何となく忙しくて会つてないね」

「連絡は取つてゐるの?」

「たまにメーリルか来ねぐらしたけど……どうで?」

彼女はグラスを両手で包むようにして、その中を見詰めてこう
何となく言い難そうな様子だ。

俺は、先を促した。

なんか……最近、元気がないみたいなんだよね……」

彼女が言うには、アヤと連絡をとつても、今ひとつ元気がない。

最初は仕事がキツイのか、とか悩みもあるのか、とか色々考えていたけど、どうもはっきりした事はわからない。

良かったら俺が様子を窺うなり、

遊びに誘うなりしてあげてほしい、という事だつた。

俺は、それに反対するような疑問を投げかけた。

「俺が誘つても効果ないんじやないの？」

「そんな事ない」

「だつて、仕事が上手くいかない……

とかつて話なら俺にはどうする事も出来ないよ。

他にも、んー……例えばアヤちゃんに何か悩みがあつたとして、さ。

俺が何かして、どうこうなる問題じやないと思うんだけどなあ……

俺は考えた。

おそらく、

アヤも環境の変化に戸惑つているだけではないのだろうか。

きっと、

職場の人間関係や風習に驚いたり、当惑したり、悩んだりしながら、懸命に自分を適応させようとしているのではないだろうか。俺と同じように。

女性の方が、些細な事に敏感でつるさい人間が多い、と聞く。そういう人が周りに多いのではないか。

きっと、職場に溶け込もうとする毎日に、神経をすり減らし、エリの誘いを受け入れる余力が残っていないだけではないのか。勝手な想像だつたが、俺はアヤの状態を、そう判断した。アヤも俺も似たような状況なのだろう、と。

俺だつて大学の友達には会つていない。

今日だつてエリから誘われなければ、自分からエリに声を掛けて、食事でも行かないか、なんて誘つ事はしなかつただろう。そこまでの余裕はない。

しかし、その点、エリは違う。

彼女は自分の通う大学の院生になつた。

通学場所も変わらない。
専攻内容も変わらない。

多少の変化はあるだろうが、

俺やアヤが体感しているような変化とは雲泥の差なのではないか、
と思っている。

だから、ヒリの話を聞いてもアヤに味方をしたい気になった。
すると、彼女は意外な話をし始めた。

「前にさ……去年の年末かな。

ほら、三人で食事に行こうって話が私の用事で
キヤンセルになった時があつたでしょう?」「
忘れるはずがない。

あの雪の日だ。

「私の用事が終わらなくて、やつと全部片付いて、
時計を見ると十時近かつたのかな。

それで、一応アヤに電話をしたのよ。
ごめん、今、終わつたつて。今日はホントにゴメンつて。
……そうしたら、あの子、別にいによつて言つてくれて。
後になつて、会つた時に、もう一度、その話をしたの」
それは初耳だつた。

俺は手元のグラスを握り締めて、彼女の話に耳を傾ける。

「アヤは全然氣にしてなくて、
でも私、あの子が、その日を楽しみにしていたのを知つていたから、
氣にしてないはずはないなつて思つて、
もしかしたら、俺くんと、いい感じになつたのかな、とか思つたり
したの」

俺は、その発言に面食らつたが、続きを促した。

「アヤは、色々考えてた事があつたけど、
俺くんに話してスッキリしたつて言つてた。
少し救われた、といふか、慰められた、といふか、
そんな意味の話をしてたよ。

俺くんが何て言つてアヤを励ましたのか知らないけど、あの子にとつては俺くんの存在つて大きいんじゃないかな。だから

「……」

彼女の瞳が揺らいだように見えた。
頬は紅潮している。

「だから……きっと、私には言えなくて、も、俺くんが訊けば話してくれる事もあるつて思うんだよね。
ちょっと悔しいけど……」

彼女は、そこで言葉を切つて

目の前のグラスを取り上げて口をつける。
ジントニックだつたか。

透明な液体が少しずつ減つていく。

俺も、それに倣つて自分のグラスを口に運んだ。

(悔しい?)

最後の言葉の意味はわからないが、

昔から仲の良いエリよりも俺の方に心を開いている部分がある事に
彼女は不満があるのだろう、と解釈した。

それから彼女は、こんな話をした。

「あの子つて大学入つた頃から見ているけど、
ちょっと変わった子でさ……」

(ちょっと、か?)

俺は言いかけた[冗談を仕舞いこむ。

「何て言うか、

悪く言うと自分勝手つていうかマイペースつて言うかで、
天然つて言うか、とにかく、そんな感じなんだよね。
友達同士で食事をしようつて時に、

『どこに入るか?』ってなるじゃない。
そういう時に一人だけ『あそこがいい』つて
皆の希望とは全然違う店を主張したり、
グループで研究テーマを決める時でも

『これがしたい』って譲らなかつたりしてね。

で、女の子つて、そういうのを嫌うからで、一年もしない内に自然と学科で孤立しちゃつてね。

外見は可愛いから男は寄つて来るんだけど、

でも彼女の性格を見ちやうと『我儘』って映つちやうみたいでさ、なかなか長くは続かなくて……』

彼女の話は、俺の知らないアヤの姿を浮かび上がらせてきて、俺は自分中の『アヤ』という存在を再考しなければならなくなつた。

「でも、私は、

あの子の、そういう、はつきりした所が好きだつたから付き合いやすいつて思つてたんだけど、

他に、そう思つてくれる子はいなくて。

私は私で仲の良い子がいたから、アヤに紹介したりするんだけど、どの子も、『嫌だ』とまでは言わないんだけど、アヤとは合わせづらいから、

友達としては、ちょっと……って言われたりして。

アヤの方にも、もう少し周りに歩み寄りなよ、とか言つたけど、

『私はこれでいい』って言われちやうと、もつどうしようも出来なくてね』

彼女の表情に悲しげな色が宿る。

「で、そういう時に、あのサークルの話を聞いてさ、試しに参加してみようつてなつたんだよね。冷やかし半分で、

でも、行つてみたら思つた以上に居心地が良くて、

二人で『いい所だね』なんて言つてさ。

俺くんもわかると思うけど、

決まりとかもないから自由だし束縛もないから、

アヤも大学で感じるような窮屈さは感じなかつたんじやないかな。

あそこにいる人は初対面でも気楽に話せたからね

それは、俺も良くわかる。

彼女の語ったサークル評は、

正に俺が、あのサークルに対して感じていたまで、
彼女が自分と同じような思いを抱いているのを知つて、
更に親近感が増したように感じた。

今になつて思うが、あのサークルの常連は変わつた人間が多くかつた。
若い男女が集まっているのに、

会話の内容は研究関係や趣味的な話題が多くて
恋愛の割合は極端に少なかつた。

時々、恋愛志向の強い人間が参加していく事もあつたが、
そういうものを第一に求めている人は次第に来なくなつたものだ。
元々、恋愛的な出会いを求めていなかつた自分は、
その雰囲気を好ましいものと思っていたので何度も参加したし、
参加者達の互いを必要以上に干渉しない姿勢も
居心地の良さを演出させるのに役立つっていたようだと思つ。

振り返つてみても、

俺は、あの会に参加して、あの場で必要以上に
自分のプライベートな部分について訊かれた事はなかつたし、
不快な思いをした事もなかつた。

「その内、誰かは教えてくれなかつたけど、
アヤから好きな人が出来たって言われた時は、

あー……この子も、なんか変わってきたなあつて思つてたんだけど、
俺くんに送つてもらつたりして、他人に迷惑かけたりするような所は
変わつてないなあなんて思つたり……」

「言つほど迷惑でもなかつたよ」

俺は昔を懐かしむ。

思い返せば、腹を立てるような事ではなかつた。
今では、いい思い出だ。

「そう言つてくれると私も助かる。

きっと、あの子も、俺くんが怒らないし迷惑そつじやなかつたから、
頼つたり出来たんだと思うんだ。

だから、そういう意味でも俺くんには心を許してるとじゃないかな

「それは言い過ぎだよ」

「ううかな?」

「ううだよ

「私は違うと思つけどな。

あの子にとつては、俺くんって一番の男友達だと想つよ」

「ううかな……」

「うん、きっと、やう。だから、もじばしくなくて俺くんが嫌いじゃなければ、

話し相手とかになつてあげて欲しいんだ」

「わかった

俺は彼女の要望を受け入れて、

なるべくアヤと連絡を取つていくよじてうつと決心した。

俺とアヤの家は駅で一つ離れている上、職場も逆方面だから帰りに待ち合わせる、というのも難しい。その上、休みや生活時間も合わない事がが多いから、会えたとしても、きっと短い時間だらう。

ゆっくりした時間を取らうとすれば、

連休とか夏休み、年末年始とかに限られるのではないか。
しかし、メールをする回数くらいは増やせるだらう。

とにかく、様々な問題点はあるが、

アヤとの接点を意識的に増やしていく、と思い始めたのは、
エリと会った、その時からなのは確かだつた。

エリから話を聞いた後は、

不自然でないよじにアヤへのメールの回数を増やし始めた。

最初は、「何してる?」「とか」「最近どう?」「みたいな

軽い感じのものや自分の近況を報告するようなメールを送った。彼女も俺に呼応するように返事をしていくようになると、次第に遣り取りが増えていった。

その結果、

エリと会つてから一週間後の盆休みに一人で会う事になった。

帰省で閑散とした駅ビルの中にあるレストランで昼食を共にする。そこは、アヤの家に近い駅で、

ちょうど年末に三人で食事をしようとした場所の辺りだった。

待ち合わせたビルの前で、

暇そうな受付嬢をガラス越しに眺めながら立つていると、

向こうから見慣れた姿のアヤがやって来た。

ノースリーブにスカート、短いヒールを履いている。

夏らしい、女らしい格好だ。

それは、去年の夏も見ていた彼女の姿で、一年経つても変わらないな、という印象を受けた。

「お待たせ」

彼女は、そう言つて、軽く片手を上げた。

俺達は中に入つて、エレベーターで上がつていく。

目的の階に到着すると、洋食の店を選んだ。

店内は、外と同じく空いていて、窓際の席に座る事が出来た。

良く晴れて、青い空を埋め尽くすように雲が広がっている。

表の景色を眺めながら、ぽつりぽつりと思い付いた事を話し出す。年が明けてから、ちゃんと彼女に会うのは初めてだ。

卒業までは、

何度も機会がない訳ではなかつたが、会わずに今に至る。

何となく都合が合わなくて会いそびれていた印象があつた。

それでも、隔絶の感がしないのは、メールの御蔭か。

細かい事はわからなくても

大まかな事情なら理解しているような気がする。

話し始めるとい、益々昔に戻ったような気になった。

明るい声や、笑い方、口振り、仕草、

どれを取つても、俺の知つているアヤのままだ。

悩んでいるような素振りも見えない。

ただ、話し振りから少し仕事に疲れているようにも感じられた。

俺は、あまりに自然にアヤとの会話に入つていけたので驚いた。
もう少しげこちなさがあるかと予想していたからだ。

そして、暫くすると、

どこかに彼女の変化した部分を探し出してやろうと、

意地悪にも似た気持ちが湧いてきて、

長時間の探索の末、漸く、化粧の仕方が大人っぽくなつた、

などという微小な発見をして嬉しくなつた。

それは目元を強く見せるようなメイクだった。

改めて、見直してみると、

より彼女の眼差しが強調されているようで、

ただでさえ目立つ部分が一層引き立つて

吸い寄せられるような気持ちになつた。

彼女は、よく笑つて、よく食べた。

俺も同じようにした。

それから一時間ほど過ごして、エレベーターに乗つた。

下の階で、洋服や雑貨を見ながら他愛もない雑談を繰り返す。
夕方には彼女と別れた。

予想通り、何か収穫を得られた、という感覚はなかつた。

エリに話した通り、これで何かが変わるような感じもなかつたし、
アヤも俺との事を特別喜んでいるような様子にも見えなかつた。
極普通の友達同士の食事だ。

傍から見ても、そう見えるだろう。

しかし、これでエリが満足するなり、

それでいいのかもしない、と自分を納得させた。

俺からのメール回数が増えたせいか
盆の食事のせいかわからないが、

秋にかけてアヤとのメールのやり取りは頻繁になつた。

俺は、その中で、

何か話したい事があつたら、いつでも聞くから、というような
ニュアンスを織り交ぜながら気長にアヤの様子を窺つていた。
だけど、メールを繰り返すだけで、
あれからアヤに会う機会は一度もなかつた。

そうして一ヶ月が過ぎた。

秋が終わり、冬が始まるとしている。

俺は仕事に大分慣れてきた。

付き合いづらい人がいたり、

人間関係は必ずしも良好とは言えなかつたが、
仕事が落ち着いてきた事もあって

毎日を無難に過ごせるようになつてきた。

アヤも俺と同じように仕事に慣れてきたのか、
吹つ切れたような様子のメールが増えた。

その頃、俺に重大な変化があつた。

春先に再会した学生時代の友人がきつかけで、
ある女性と会う事になった。

それがアヤに話した人だ。

彼女から連絡が来たのは数年振りで、

最初にメールが届いた時は随分驚かされた。

それから、

何度もメールや電話のやり取りをして直接会つ約束を交わした。

連絡を取り始めた当初は、

近況報告などのやり取りでしかなかつたが、

暫くすると彼女の方から会いたい、と言つてきた。

数年振りに会うという事に、

俺の中で若干の抵抗があつたものの

最終的には好奇心の方が勝つた。

彼女は、どうなつてているのだろう。

俺は、彼女にどう映るだろう。

そんな経緯があつたので、

最初に彼女からメールが届いてから

会うまでに一ヶ月近く時間がかかつてしまつた。

待ち合わせ場所は、

彼女の指定に従つて俺の家から少し離れた駅になつた。

そこは、暫く行つていない方面だつたが、

以前住んでいた場所に近く

土地勘がある事もあり問題なく辿り着けた。

俺は約束の時間より大分早く着いて彼女を待つた。

待つてゐる間、俺を支配してゐたのは複雑な感情で、時折、やはり来るべきじやなかつたんじやないか、といふ後悔に近い念と、

逃げ出したいよくな気持ちと、それから彼女がどうなつてゐるだろう、

といふ期待に似た気持ちと様々だつた。

待ち合わせの十分前に、彼女はやつて來た。

髪は少し伸びていたが、

俺の記憶と変わりないその姿に、

何故か温かいものが込み上げてくる。

俺は咄嗟に目を擦つた。

彼女の姿だけではなく、色々なものが俺の神経を刺激する。太陽や風や街並み。

見るもの全てが、あの頃と同じだつた。

夢のような、幻想のような、情景。

既に俺が待つてゐる事に彼女は驚いていた。

最初に交わした言葉は覚えていない。

どちらからともなく話し出して、

そこから少し歩いた場所にあるファミレスに入った。

食事をしながら、御互い語り合つ。

俺の話す内容の多くは謝罪に近い意味の言葉ばかりだつた。

彼女は笑つて、それを許してくれた。

ガラス越しに外を眺めると、

同じパンフレットを持った人達が行き交つてゐる。

どうやら映画のパンフレットのようだ。

土曜だから何か新作が公開されたのだろう。

そう言えば、近くに映画館があつたな。

その日は、

これまで送り合つたメールの内容をなぞるような話をした。
既に知つてゐる内容ばかりだつたが、
文章ではなく直接話をする事に意義があるように思われた。
途中まで彼女を送つて、別れた。

帰り道は、とても晴れやかな気分で、

家を出た時のような重苦しい気持ちは微塵もなかつた。

その心境の変化を、
我ながら何て勝手なんだろう、と胸の内で苦笑した。

師走に入ると、アヤに会つより彼女と会つ機会の方が増えた。
アヤとは、全く連絡を取らない訳ではなかつたが、

彼女と比べるとメールの量も電話の回数も比較にならなかつた。
俺は時間が取れない事が多かつたが、

彼女は俺よりも時間的に余裕があつたので、

俺の都合に合わせてくれた。

俺達には、空白があった。

だから、一緒にいる時間と交わした言葉で、
その空白を一所懸命に埋めようとした。

毎日、連絡を取つた。

電話はするし、出来なれば最低でもメールは送つた。
その内容は次第に濃いものになつていく。
会えば、短い時間でも話し込んで、
街中で歩く時には手を繋ぐようになった。
二人の間の溝は、いつしか埋まつてなくなつていた。

俺達は恋人同士として交際を始めた。

それから一、二週間が過ぎて冷静になつてみると、
不意にアヤの事が頭に浮かんできた。

彼女との事に浮かれてアヤの事を考える余裕がなかつたが、
アヤは今の俺を見て、どう思うだろう?といつ思いに囚われ始めた。
その度に思い出すのは、あの雪の日だった。

ちょうど一年前の今頃だったのが、余計に生々しく思い出させる。
去年の、あの雪の日にアヤと交わした約束は何だったのだろうか?
二人で、過去の亡靈を振り払つたのではなかつたのか?

そうして、新しい未来の自分に思いを馳せよう、
と話したのではなかつたのか?

そう思わないではいられない。

そんな風に考えると、

アヤが今の俺の状態を知つても、きっと喜ばないだろうと思つし、
エリも同じように考えても不思議はない気になつた。

誰かが悪い訳ではないのかもしれないが、

何となく俺だけが抜け駆けをしたような気になつて、

それからは、彼女といてもアヤやエリの顔が突然、頭に浮かんでくるようになつた。

そうして思い悩んでいる内に、年が押し迫ってきた。

俺は、いつか機会を見て、アヤとエリに

俺達の事を話さないといけないな、と漠然と考え始めた。

具体的な方法は思い付かなかつたが、

年が明けたら、折を見てアヤを呼び出そうと思つていた。

それとも、それより前にエリと話をして、

アヤに、どう話したら良いか相談しようか、とも考えていた。

年が明けた。

初詣は彼女と一人で行つた。

電車で三十分くらい行つた所にある神社だ。

元日の昼間に出来かけたが、晴天のせいか、かなりの人手だった。
開けた場所にある神社なのだが、
参道は人で溢れ、押されながら、
どうにか参拝を済ませた時には御互い疲れ切つていて。
帰り道、人の流れの少ない場所で立ち止まつた。
運良く座れるような場所が見付かつたので、並んで腰掛ける。
俺は、隣にいる彼女を気遣つた。

「疲れたね」

「……うん」

彼女は少し疲れているように見えた。

「大丈夫？」

「平気」

「疲れたら言ってね」

「……ありがとう」

「あ、何か飲み物でも買ってこようか？」

俺は立ち上がり、

近くの自動販売機で温かい飲み物を買つ。

二人並んで、それを口にした。

「あつたかい

「少し落ち着いた？」

「うん」

「人が多くて歩きにくいから疲れるんだよ」

「そうかもね」

「もつと空いてる神社に行けば良かつたね。「ごめん」「確かに、ちょっと疲れただけど……楽しいからいい」

「そう？」

「うん。暫く座つていれば元気になるよ」

俺達は、そのまま十分ほど座つて

ぼんやりと道行く人を眺めながら話をしていた。

俺は、彼女が無理しているんじゃないだろうかと心配したが、彼女は、それを否定した。

「こんなに人がいるつて思わなかつたから、ちょっと疲れたけど平気。

……それよりも去年の今頃は、

俺さんと、こうしてゐなんて思つてなかつたから、

……なんか不思議な気がする」

駅までの帰り道は、広い通りが中央で区切られていて、参拝に向かう人と帰る人の流れを綺麗に分断していた。俺達は帰る人の流れに乗つて歩き始める。

二、三列程度に広がつて駅に戻る人の流れのすぐ隣を、神社に向かう人達が同じように広がつて歩いていく。道は広く、見通しはいい。

俺達は駅に向かっているので、

これから神社に向かう人達が良く見える。

すると、遠くの方で知つた顔を発見した。

その神社は、

場所柄、地元の人間が足を運ぶ割合が高かつたから、過去に何度か知り合いに会う事も少なくなかつたが、その時ばかりは心臓が縮む思いがした。

彼女に悟られないように何度も遠目に確認してみたが、何回見ても、それはアヤに間違いなかつた。

視界に入った瞬間から、その服装や髪型に見覚えがあつた上に、隣にいるのがエリだと気付いた時には人違いではないと確信した。俺は、その時、反射的に隠れそうになつた自分を恥じた。

しかし、このまま彼女と一緒に

エリ達の前に顔を出す心構えは出来ていなかつた。

彼女の手を解いて他人の振りをする訳にもいかない。

俺は、なるべく彼女達に遠い位置を歩くように左側へ寄つた。

彼女を強引に押すような形になつてしまつたが、

彼女は俺に押されるままに流されて行く。

彼女は背が高いので、

こうして遠くに押しやつて俺が壁のようになれば、アヤ達の目に留まる可能性は低いだろう。

そして、

俺は俯き加減に歩いて、その場を遣り過ごしそうとした。エリとアヤは談笑しながら、やつてくる。

混雑している為、道の流れは、ゆっくりだつたから何かの拍子に同じ方を向けば簡単に見付かりそうだ。周りには他にも大勢の人がいたが、

俺は一人にだけ意識がいついていたので、

まるで群衆の中から一人の会話や仕草だけは違う周波数で俺に届いてくるような感じがする。

同じように、俺が少しでも声を立てれば、

簡単にアヤ達に聞き取られそうな気がして声を潜めていた。心持、左を向きながら

右半身は針のようになつてアヤ達を警戒する。
(どうか、この場は見付かりませんよう)(元より)

そう願いながら、下を見て歩く。

その甲斐あつてか、

どうにか気付かれずに擦れ違う事が出来た。

俺は安堵して小さく肩を落としたが、

彼女は、それに気付く事なく鼻唄を歌いながら
繋いだ手をブラブラと揺すつていた。

初詣の件があつてか、

彼女の事を一人に話さないといけない、
という思いは俺の中で急速に大きくなつていった。

だからと言つて、

どこから切り出せば穏やかに済むのか、いい考えは浮かばなかつた。
どう話しても無事に済みそうにない予感がする。

俺がありのままを話せば、きっと、

アヤは雪の日の事を思い出して沈んだ感じになるのではないか。
最近のメールなどから判断すると

現在アヤには彼氏がないようだし、

昔の男を忘れて建設的に生きようとしている所へ、

同じように話し合つた友人が、

全く逆に過去の女と結ばれていたら一体何と思つだろうか、
取り残された感じがしないだろうか、などと考え始めると、
気が重くなつて一向に連絡を取ろうという踏ん切りがつかなかつた。
決して悪い事をしている訳ではない。

誰にも後ろ指を指される覚えもなかつた。

それでも、一方で、どこか、あの日の一人に対して
申し訳ないような気持ちにならざるを得ない自分がいる事も確かだ
つた。

帰宅途中は、大抵アヤの事を考える。そうして、一週間が過ぎてしまった。相変わらず、どう連絡を取るうか、と算段している所へ俺の携帯が鳴った。画面を見ると、アヤからのメールで、内容は至ってシンプルなものだった。

『会つて話したい事がある』

アヤからのメールを見た時に何故か直感的に、話す時が来たのだ、という気がした。

例え、アヤの話がどういった内容であろうとも、

その場で彼女の話を打ち明けようと、その時、覚悟を決めた。

返信をして、何度も取りをすると、

今月下旬の土曜に約束が決まった。

彼女には、前もって予定が入った事を伝えておいた。

約束の日は、すぐに来た。

待ち合わせは、

アヤの家に近い駅で、盆休みに一人で会った場所だった。その日は風が強く、正午でも充分寒かったのに、陽が傾きかけた今では更に気温が下がっていた。

アヤは、この寒いのにミニのタイトスカートを穿いている。厚手のスペツツを穿いてはいるが、寒くないのだろうか。ブーツのせいで普段よりも背が高く見える。

上着はコートのせいでわからない。

顔を合わせると、

アヤは当然のように、以前と同じ店に入つていった。前回、来た時には気付かなかつたが、

その店は時間帯によつてメニューが違うようだ。

昼間は洋食屋だが、夜にはバーみたいに酒を出しているらしい。夏に来た時はランチタイムだった、という事だろう。

ウェイターが運んで来たメニューには見覚えのない名前が並んでい

る。

店内の照明は控え目で落ち着いた雰囲気を醸し出していく、以前来た時は様子が全く違っていた。

夕食には少し時間が早いせいか、

あまり混雑していなかつたので今日も窓際の席に座る事が出来た。暮れゆく街並のあちこちで

電気が点き始めるのが窓越しに見える。

既に街灯も灯つて幻想的な風景だ。注文を済ませると俺達は黙り込んでしまった。

元々アヤから誘われたので、

向こうが話しう出すまで俺は待つ事にした。

飲み物が来るまでは、とても長く感じた。

ずっと黙っている訳にもいかないので、俺は天気や体調など、当たり障りのない話題を持ち出して、何とか時間を潰していた。上辺の遣り取りが何度も続いた頃、漸く酒が運ばれてくる。二人ともビールの中ジョッキ。

グラスを合わせて乾杯をする。

飲み始めて、順々に、つまみが運ばれてくる頃になると、俺は我慢出来なくなつてアヤに今日の用件を問い合わせた。

「今日はどうしたの？」

「…………うん…………」

「何か話があつたんじゃないの？」

俺は重ねて訊く。

彼女は俯いてテーブルの一点を見ながら何度もグラスを口に運んでいた。

俺は、その様子を見詰める。

伏し目がちに瞬く睫毛と張りのある頬と、それから胸元から覗く鎖骨を順番に見た。今日も髪を巻いている。

全体が波打ち複雑な模様を描いていて、それが彼女の心境を表しているような気がした。

「あのわ……」

アヤは、漸く語り出す。

「俺くん、私に言つ事ない？」

「言つ事つて？」

今日の彼女の態度や雰囲気から、何の事であるか想像はついていたのに、

最後の望みをかけて万が一違つたらいいな、

という思いで、そう訊き返した。

「私……見ちゃつたんだよね」

「……何を？」

「初詣、で」

アヤは俺を上目遣いに見た。

俺は、やはりアヤに見られていたのだ、と悟った。

考えてみれば、幾ら周りに人が大勢いるからって、

ほんの何メートルか近くを顔見知りが通り過ぎているのだ。

よほど余所見をしない限り、

僅かでも視界に入れば見付かる確率は高いはずだった。

あの時だつて、可能性は五分五分だと思つていたし、

アヤじやなくともエリが気付けば同じ結果になるだろう。

そんな事を考えながら相手を見詰める。

向こうも俺を見詰め返していた。

その瞳が暗い照明を鈍く反射して妖しく光る。

それから俺は観念したように、全てをアヤに話し出した。

元々、会う前から決心していたので、

自分の想像以上に上手く順序立てて説明する事が出来た。

最初、彼女について言及すると、

アヤは、とても驚いた顔をした。

しかし、それは一瞬で消えて、すぐ俺に続きを促してくれる。
それから、

去年の秋頃から俺が感じた事や、してきた事を話していく。
アヤは、時々頷きながら俺の話に聞き入っていた。

「……って、感じ」

全部を話し終えると肩の荷が下りたように溜息をつく。
知らない内に緊張していたみたいだ。

肩に力が入っているのがわかる。

アヤは、「そう」とだけ言つた。

俺は、アヤの反応が怖かつた。

何と言われるだろう？

冷静に考えれば、

アヤが俺に対して何か否定的な事を言つはずはない。
非難する立場にもないし文句を言つのも可笑しい。

ただ、俺からすれば、

あの雪の日の事を持ち出されるのだけは心苦しい思いがした。
アヤに、どう話そつかと考えている時も、

彼女との馴れ初めを語るのは簡単だったが、

その事だけには満足のいく説明を付かなかつた。

どう言えど、あの時の俺の状態を説明出来るだろうか。

そればかり考えていた。

しかし、それは杞憂だった。

アヤは、あの日に関しては一言も触れてこない。

ただ、付き合い始めのカツプルに訊くような、

どれくらい会つていいのか、とかデートはどうに行くのか、
とか当たり障りのない質問ばかりをしてきた。

それも活発な取り取りではなく、

ぽつぽつと言葉を置いていくような会話だったから話の展開が遅い。

どうも彼女は塞ぎこんでいる様子で、俺の話を聞きながらも
頭の隅では別の事を考えているような感じだった。

それで俺は、

アヤの問いに答えながら、その理由を探るひつとした。

俺と会った時には、アヤは、もつ少し明るい態度であった。

どちらかと言ひつと、

俺に探りを入れて初詣に連れていた彼女の事を訊き出そう

というような姿勢が見られた。

それが、彼女について話しうしてから、アヤの様子が変わった。

口数も減つたし、俺の方を見ない。

俺は、

考へても思い当たる理由が見付からなくて、直截アヤに訊いた。

「どうした?」「

「何が?」

「元気ないね

「うん……」

「俺、マズイ事、言つたかな」

「ううん、違うの」

「じゃあ、何?」「

アヤの指がグラスに伸びる。

テーブルの上だけが照度が高い。

その爪先が照らし出されると、口紅と同じ桃色なのに氣付く。

店内は控え目な音楽が流れていって、それが俺の耳に届いてきた。ジャズだろうか。

軽やかなピアノの音色が響く。

「私さ……悪い事、言つちゃつたね……」

アヤの声は消えそうに小さい。

耳を凝らして、その先を待つた。

「前にさ……

女人人は待つてないとか、知つた風な事、言つちゃつて……

「何の話?」

俺が問うと、アヤは、あの雪の日に自分が話した事を繰り返した。

「そんな事、言つた？」

あの日に関して、俺の記憶は偏っている。
その殆どは、言葉にすれば、アヤとのキスと、
彼女を忘却する方法と、未来への希望、
というようなものになるだろうか。

とにかく、そういうもので占められていて、
アヤが、今、持ち出してきた話の多くを俺は忘れていた。
黙つて俯くアヤ。

「恥ずかしいよね、私。

偉そうにアドバイスマтиな事、言つておいで……これじゃあや、
なんか俺くんの恋愛を邪魔してるみたいじゃない？」

俺は、慰めに聞こえないように注意して、その言葉を否定した。
その時になつて、俺は初めて知つた。

アヤにとつては、

あの雪の日の位置付けが、俺とは変わつてきているのだ、と。
最初、俺にとつての雪の日は、アヤとの結束の日で、
言わば同じ目標に向かつて共闘を誓つた、そんな日だつた。
だが、俺には彼女が出来た。

俺とアヤは付き合つている訳じやないから、
別に恋人が出来たつて構わない。

構わないのだが、その相手が、

あの時、アヤに語つた女では話が違つてくる。

あの時の御前は何だつたのか、と問われれば返す言葉もない。
だから、俺はアヤを裏切つているような気がしたし、
出来るなら、あの日の事に関する触れて欲しくなかつた。
その話を出されれば、俺は完全に敗者で、アヤは勝者だつた。
そう思つていた。

しかし、俺が考えるようアヤは考えていなかつた。
アヤから見ると、あの日の自分の言動は、
結果的にではあるが、俺に足枷を掛けて、

本来ならどうくに結ばれていたかもしない一人の将来を妨害するような形になってしまった、と感じられるようだ。だから、アヤも、あの日については触れて欲しくない。そういう思いが湧いてきたみたいだ。

もし、俺が付き合っている彼女が、別の誰かだつたら、きっとアヤは祝いの言葉を並べてくれたのだろう。

アヤは、頻りに、

あの日の自分の言動を後悔するような台詞を吐いた。俺は多少、大袈裟なくらいの言葉で慰めた。

自分が非難されるような事態ばかりを想像していたから、こうした場面になるとは思いもよらなかつた。

「ホントに、ごめんなさい」

何度もかの遣り取りで、

大分落ち着いたアヤは、最後に、そう言つて頭を下げる。

「もういいって」

「だつて……」

「別に、アヤちゃんが何も言わなかつたとしても、俺達がもつと早く付き合つているとは限らないし」

「そうだけど……」

俺は、もう店を出ようとした。

このままでは堂々巡りだ。

いつまで経つても話が終わらない気がした。

アヤを促すと、彼女は素直に従つた。

結局、アヤの用件は何だったのかわからなかつたが、このまま話し合いを続けていても同じ事の繰り返しで、きっと好ましい結果を迎えないだろうから、日を改めよつ、と判断した。

店を出て、アヤを家まで送つて行く事にした。

彼女は、それを拒んだが、

夜も更けていりし駅からの道は暗い所もあるので反対を押し切つて勝手について行つた。

夜道は、とても静かで、こんな時間に、こつして、この道を歩いていると、あの頃の事を思い出した。空気は澄んでいて、星がよく見える。

月は見えない。

新月だろうか。

「この道、よく通つたね」

隣のアヤに声を掛けた。

「そうだね……」

俺の言葉に小さく頷いた。

その時、彼女の香が冷たい風に乗つて届いてきた。

吐く息が白い。

「なんか……懐かしいよね」

俺は努めて明るく言った。

頭の中には、アヤやエリの事、サークルの事、大学の事……色々な事が浮かんでいた。

どれも懐かしくて、過ぎ去つたものばかりだけれど、それらを思い出す事は決して後ろ向きな感傷からではなかつた。

アヤは、それには答えず、黙つて隣で歩調を揃えている。二人の足音だけが空に響く。

考えてみれば、

アヤは、この道を毎日のように通つているのだろうから、懐かしさなんて感じているのは俺だけなんだろう。

頭の中で何か他の話題を探している内に

彼女の家に着いてしまつた。

こんなに近かつたのか。

自分の記憶の曖昧さに驚く。

「ここでいいよ」

彼女のアパートが見える場所に着くと、アヤは俺に言った。

向こうに彼女の部屋のドアが見える。

電柱に取り付けられた街灯が

鈍い光を投げかける空間に、一人はいた。

「ああ……」うん

頷いて、立ち止まる。

俺は見送りうとして、その場で部屋に入るよつに促した。

アヤは一步、アパートの方に足を向を変え、立ち止まる、俺の方を振り返る。

「私も……懐かしいって思ったよ」

わつきの答えだろうか。

「そうだね」

笑つてみせる。

随分、間の空いた遣り取りだ、と思った。

「この道を何回、俺くんと通ったかなあとが、

……「ん、もう色々あり過ぎて言葉にしきれないくらいだよ

「俺も、そう思つ」

「でもれ……」

「うん」

「でも、もう俺くんは、あの頃の俺くんじゃないし、

私も、あの頃の私じゃないんだよね」

「どういう意味？」

「俺くんも私も学生じゃないし、同じサークルとかじゃないし……」

「そうだね」

「懐かしい……なんてさ、そんな事ばっかり言つてられないよね

彼女の言葉からは、

何故か針のような、ある種の厳しさが感じられて、

そして、それは俺の胸に強烈に響いてきた。

「私も……ちょっと勘違いしてたのかもしねない

「勘違い？」

「てゆーか、甘えてたのかも」

彼女は、その頬に手を触れる。

視線が足元に延びる二人の影を見ていた。

俺も、自然と、その先を追う。

彼女は頬杖をつくような体勢で俯いていたけれど、やがて、その手を下ろすと俺を正面から見返して、言った。

吐き出した息が白く尾を引いて伸びる。

俺に届くよりも遙かに手前で、それは消えていった。

「俺くんにも……甘えていたんだよね、きっと

その声は、とても微かな声で、

まるで自分に言い聞かせるみたいな口調だった。

その時、俺は、

その言葉がはつきりと聞こえたのに、答える言葉が見付からない。何と言つたらいいのだろう。

アヤも黙ってしまった。

それつきり一人は無言で立ち去った。

俺達の周囲は一切の静寂で、

他に何も活動しているものは存在しないような気になつてくれる。

二人の吐く息は夏の雲のように鮮やかに白い。

その連想から不意に見上げると、空は曇つていて、あんなに綺麗だった星は見えなくなっていた。

俺にはアヤの気持ちがわからない。

一年半も付き合いがあつて何度も話して、

酒も飲んで、何となくアヤの事をわかつた気になつていたけど、こういう時になつて俺は急に心細くなる。

俺の知っているアヤは、本当のアヤじゃないんじゃないか、と。だから、

こんな場合に何を言えば良いのかわからなくなつてしまつただ。

何か言わなければいけない。

だけど、それが彼女の望む言葉なのか。

そうして、迷つて、何も言えなくなつてしまつ。

アヤの気持ちを掬い上げるような、満たしてやれるような言葉。

それが必ず、あるはずだ。

そう思えば思「つほび」、

思考は乱れて突発的な思い付きばかりが浮かんでは消えていく。

「帰ろうか」

どれくらい、そうしていたのか、わからなかつたが、アヤが言った、その言葉がきつかけで俺達は別れた。アヤを見ていると、

何か言わなきゃいけない事があるような気がして、でも何も出てこなくて、いつまで経つても帰れそうになかったから、俺は「じゃあ、また」と急ぐよに言つと、一度も後ろを振り返らないで駅に向かつて歩き出した。

それからアヤには会つていない。エリにも連絡をしていなかつた。

一月に入ると、急に仕事が忙しくなつてきた。
年度末の為、仕事の量が増えてくると残業も増え出して一年目の自分には次第に余裕がなくなつってきた。
職場と家の往復が続くと、

自分の事をする時間がなくなり部屋も汚くなるのに任せていた。

一週間ほどするとポストに同窓会の案内が届いていた。

送り主は、大学時代の友人だ。

彼は、俺と同じ学科で、葉書の内容を見ると、卒業して一年が経過するので近況を語り合いましょう、というものだつた。

開催予定日は

三月下旬を予定しているので、まだ一ヶ月以上先だ。

文面の下の方に連絡先の電話番号、アドレスなどが書いてあり、
今月中に御返事を戴きたい、とある。

その連絡先には見覚えがあつた。

何となく微笑ましい気分になり、後で返信するつもりで葉書を仕舞う。

それから二日後の日曜日。

仕事も一旦、落ち着いて久し振りに自分の時間が出来た。
休日出勤もなく昨日も早く帰れたので、

前から溜まっていた雑事を片付けようと決意していた。

朝から掃除、洗濯をして捨てる「ミニ」を纏めた。

昼に簡単な昼食を摂ると、午後はクリーニング屋に行き、
その後、スーパーで食材を買つた。

帰宅すると、買い込んだ食材を冷蔵庫に入れる。

その頃には夕方になつていた。

予定していた用件を全て片付けると、

コーヒーを淹れ、仕舞つてあつた葉書を取り出した。

参加するつもりで返事をしようとして、

もう一度、じっくりと眺め、日時などを確認する。

文面は簡単な挨拶で始まって、流れるように文章が続いていく。

読んでいると、

何となく参加して皆で話したくなるような、そんな文章だった。
そつのない内容だ。

書いた男の顔を思い出す。

彼らしい。

最初に見た時には気付かなかつたが、

片隅に、同じ内容のものを

大学時代に使用していたアドレスにメールで送信した、
と書いてある。

葉書とメールで二重に送る事によつて連絡漏れを防ぐ目的らしい。

そうした点も彼の人柄を思い起させた。

大学時代に使つていたアドレスは、今は殆ど見ていない。
春からは、仕事用に与えられたアドレスを使つていたし、
私的なものは携帯で済ませていた。

葉書を見て、メールの方も確認してみよう、と思つた。
返事はメールでも構わない、とあるから、

そこで返事が出来るなら、それに越した事はない。

部屋にあつたノートを開いて、立ち上げる。
ネットに接続してメールボックスを開いた。

一年近く開いていない割りには
届いているメールは殆どなかつた。

大学関係者しか知らないアドレスだし、
元々、俺の交友範囲は広くない。

一番上に目当てのメールがあつた。

それを開いて、返事を書く。

やはり内容は葉書と同じものだつた。

送信して元の画面に戻る。

俺は、上から一番目のメールを見て驚いた。
同窓会メールのすぐ下にあるメールの送信者が

アヤの名前になつていたからだ。

俺は、それ以外のメールを古いものから開いていく。
どれも大した内容ではない。

今回のように葉書などで、

事前に、その内容を知らされていたメールばかりだつた。
最後に一通だけ残つたメールを開く。

間違ひなく、送信者はアヤで、

受信日時を見ると、食事をした日の五日後になつてゐるから、

もう三週間近く放置していた結果になる。
動悸を抑えながら文面に目を移していく。

そのメールは、とても長くて、

最初に開いた時には画面に全部表示し切れなかつた。
長さを確認しようと画面を下に動かしていく。

かなり下まで行つても終わりが見えなかつたから、一旦、諦めて、
最初にスクロールさせてから、俺は、そのメールを読み始めた。

10

俺くんへ。

言いたい事が山ほどあつて、

直接会つて話すと伝えきれそうにないからメールにします。
気分を悪くしたらごめんなさい。

長くなつてしまふけど、

開いてくれたからには最後まで読んでくれると嬉しいな。

俺くんが、このメールを見るのは、いつ頃かな？

仕事帰りかな？

休みの日かな？

それとも、ずっと先の何年後かな？

もしかしたら、

一生読まれないのもしれないっていう可能性もあるけど、
それでもいいかなつて思いながら書いています。

一円に俺くんと、「飯を食べよつてなつた時、
本当はもつと楽しい場になると思つてたんだ。
前も話したけど、

私は初詣で俺くんが彼女さんらしい人といふのを見たから、

その辺を面白おかしく突っ込んでやるつ、
みたいな気持ちでいたのね。

その時、私は声をかけようと思つていていたんだけど、
結局スルーしちゃいました。

それは、邪魔しちゃいけないとか、そういうふう気持ちじゃなくて、
あとから『見たよー』って驚かした方が
面白いかなって思つたからでした。

それに私が俺くんに気付いたのも遅くて、
あつ、と思つた時には、もうすれ違いそりだつたつて言ひつるものある
かな。

追いかける事もできたけど、人がスゴイいたし、
別に今度でいいかつて気持ちもあつたから。
それに、俺くんが報告してくれるのを待つて、
そこで突つ込んでも面白い、とかね。

照れる俺くんに、知つていながら驚いてみせる私……とかね、

そんな様子が浮かんだりしてたよ。
でも俺くんから話してくれた感じがないから我慢できなくて、
結局、私からさくような形になつつけたけど。

実際に会つて、いろいろきいてみると、
俺くんの彼女さんが前に話してくれた人で、
俺くんを驚かすつもりが私の方が驚かされてしまつて、
それで茶化すような雰囲気じゃなくなつてきましたし、
それ以上に私のしてきた事が

俺くんの邪魔をしてしまつたんだつて思い始めたら、
なんとなく暗い感じになつてしましました。

ホントは、あんな感じになるつもりじゃなかつたのに『ゴメンね。

俺くんは『そんな事ない』って言つてくれたけど、
結果的に私が

俺くんの恋を邪魔していたのは間違いない、と思つよ。

だつて、あの時、

私が『諦めちゃダメだよ』とか『もう一度ぶつかってみれば?』みたいに言つていたら、俺くんは違う行動をとつたかもしれないし、違つた結果になつたかもしないんだよ。

そう考えたら罪悪感みたいなものがわいてきてね、どうしようもないんだよね。

いてもたつてもいられない、みたいな。取り返しのつかない事した、みたいな。

本当は、邪魔するつもりなんてないのにね。『ゴメンね。

なんか謝つてばっかりだね、私。

でも、あの時。

あの雪の日に俺くんと話した事で

私は、ずいぶん楽になつた気がするんだ。

なんとなくだけど、

一緒に頑張つていこうっていう仲間ができたつて感じかな。俺くんつて、

あまり思つてる事とか感情とかを顔や態度に出さないから、この人つて恋愛とかに興味ないのかなつて思つてたりしたんだけど、ちゃんと好きな人とかいるんじやん、つて。

悩んだりとかしてるんじやん、つて。

その時までは俺くんといふ

私だけが下らない事で悩んだり考えたりしてゐるのかなつて、私が小さい人間なのかな、なんて思つたりしていただけど、そうじやないんだつて思えたんだ。

みんな同じなんだ!なんて思えたりして。

ただ私が俺くんに共感できただけなのに全人類が私の仲間とか味方みたいに感じられたんだよね。単純だね、私。バカみたい。

私、昔からちょっと変わってるみたいで、

女の子同士のグループとかに

うまく打ち解けられない時があつたんだけど、

あのサークルは、つきあいややすい人が多くて、

『なんだ、私がおかしいわけじゃなかつたんだ』って

思えるようになった場所だつたから、

大事にしたいなつて思つてたんだけど、

エリに、そういう話をしたら

『そういう風に大事に思つてるようには見えない』

なんて言われちゃつたりして。

でも、そういう風に思つてゐるからこそ、

そこにいる人を好きになつたわけだと思つんだ。

それは偶然じやないとと思うよ。

あのサークルが私にとつて大事だつたから、
そこにいる人を大事に思えたんだろうし。

この考えは間違つてないつて思うんだ。

だから、あの場にいた人は、みんな大事だし、

俺くんの事も大事だつて思つてるよ。

俺くんが私の事をどう思つてゐるかはわからないけど、

私は俺くんの事をホントに大切な友達だと思つてゐるから、

好きな人がいて、その人とつきあつてゐるなら

幸せになつてほしいなつて思うんだ。

それから、

俺くんと彼女さんの事を聞いて思つたんだけど、
やつぱり諦めちゃいけないよね。

今はダメかもしれないけど、

この先どうなるかわからないし、つて事、いっぱいあるよね。

俺くんは彼女さんの事を忘れてなかつたから、そうなつたわけだし、

彼女さんの事は、よくわからないけど、

きっと俺くんと同じだったんじゃないかなって思うんだ。

そういうのを聞いて、なんか勇気づけられた気がするよ。

私も、それに便乗して、

もう一度告白してみようかなって思つんだ。

前は断られたけど、

彼だって、あの頃とは違つているだろし

私だつて変わつていてるから、

もしかしたら違う返事が聞けるかもしねないしね。

正直に言うと、私は、まだ彼の事を吹っ切れていません。

今は仕事で忙しいから紛れている時もあるけど、

ふとした時に、どうしてるかなあなんて彼の事を思い出しちゃうし、

職場の歓迎会とかで

男の先輩とかに飲みに誘われたりするけど、

それを素直に受け入れられないし。

これって俺くんと同じ状態？

なんて都合のいいように考えて、

私も俺くんみたいになれるかも、

なんて最近思つたりしてるんだ。ホント、バカ。

そう思いながらも、

ダメだつた時の事も考えたりして、

そうなつたら、そうなつたで、

また新しい人を見つけていけばいいと思うし、

きっと、見つかるんじやないかな、って気がするんだ。

前は彼の事しか考えられなくて、

でもフラれたらどうしよう……

みたいな絶望的な気持ちしかなくて、

実際にフラれたんだけど、

思つていた以上の落ち込み方に自分でも驚いたりして……。

もう男の人はいいや、ってなってたけど、今は、もう少し違った感じでいるよ。

いつか、もう一度、彼に告白する時が来て、それでも断られたとしても、

まあ、仕方ないか、っていう前向きな気持ちです。これも俺くんのおかげなのかな。

だから。

私から俺くんに一つ申し込みたい事があるの。前に何度か飲み会で飲み比べをしたけど、

今度は幸せ比べをしようよ。

あ、今、『コイツ、何、言つてんだ?』って思つたでしょ? それか、『イタイ女だな』とか思つてる?

まあ別に、それでもいいけどね……。

えっと、私が言いたいのはそ、

私と俺くんが次に、いつ会うかわからないけど、

今度会う時は、私は、きっと素敵な彼を連れているから、俺くんも彼女さんとずっと仲良くして、

私の未来の彼が

『あんな彼女がいてウラヤマシイ』って

思うくらい幸せになつてよ、って事。

そうしたら、私も負けずに、

俺くんの彼女さんが見とれるくらいのいい男を連れてこつて、

『どう? 私の彼は素敵でしょ?』って見せつけるから。

そうやって、お互いの恋人を自慢しあおつよ。

私、この勝負、スゴイ自信あるんだ。

だって今まで俺くんに飲み比べで負けた事ないもん。

だから、きっと、この勝負も勝つよ。

それくらい自信ある。

だから……俺くんは、俺くんが今、考へているよりも、

もつともつと彼女さんを大事にして、なんだつたら

今度会つた時には結婚して子供もいるくらいになつてないと

私には勝てないと思うよ。

私に負けっぱなしで悔しいつていう気持ちがあるのなら、

それくらいの覚悟でいてよね。

そうじやないと私も張り合ひがないから。

でも……もしも、よ。

もしも万が一、今度会つた時に私が一人だつたとしても、
それでも変わらずに声をかけてよ。

楽しく話そよ。

私たちは友達なんだからさ、この前みたいに、
すれ違つていてるのに話もしないなんて悲しいじやない。
ありえない話だけど、

もし私がその時、彼氏がいなくて一人だつたなら、
それは私の準備が足りてないつてだけだから。
ちょっと仕度が遅れているだけだから。
変に気を遣わなくていいからね。

その時は、しうがないから

俺くんと彼女さんを精一杯、
笑顔で祝福してあげるわよ。

でも、その裏で私は着々と

俺くんを負かす準備をしていろつて事を忘れないでよね。
だから、さ。

どつちにしても今度会つ時には笑つて会おうよ。

俺くんといふ時は、いつも楽しかったから。

これからも、ずっと、そうでありたいな。

ワガママかな？

でも、もう勝負は申し込んじやつたから。

一方的だけどね。

このメールは送った、つて俺くんには知らせません。

大学時代のアドレスだから、

俺くんが見るのはずっと後になるかもしないし、
もしかしたら見ないかもしない。

最初に書いたのは、そういう意味です。

読んでほしいっていう気持ちもあるし、
どっちでもいいっていう気持ちもあります。

メールを書いたのは、

書く事で私の気持ちを整理したい、納得させたいっていうのが一番大きな動機だから、こうして書いてしまった今となつては、その目的は、ほとんど達成されている気がします。
だから、ホントにどっちでもいいんだ。

今度、会つた時に

俺くんがメールを読んでいない風に見えたなら、
私も、そう振舞います。

そうなつたら私の空回りだね。

それでもいいし。

でも、もし、これを読んだなら私の勝負を受けてよね。
それと、読んでから

何か言いたい事ができたら遠慮なく言つてきてね。

『俺たちのつきあい始めるのが遅くなつたのは、
やつぱりお前のせいだー！』
つていうのもいいよ。

責任は取れないし、謝る事くらいしかできないけど、
何度も謝るよ。

できれば彼女さんにも説明して、謝りたいな。
こういう事だつたんですよつて。

それに、今度は、ちゃんと彼女さんを紹介してほしい。
名前とか、趣味とか、どんな人なのか知りたいし。

俺くんの選んだ人なら、絶対、仲良くなれるって思うんだ。

長くなっちゃったけど、そろそろ終わります。
忙しいけど、お互いや頑張ろう。

私も頑張るよ。

俺くんに甘えないですむようにね。
じゃあな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9787f/>

サークルの大学生と

2010年10月12日14時47分発行